

放送大学奈良学習センター
開設 20 周年記念シンポジウム

2016 年 11 月 6 日 奈良女子大学記念館

日本はなぜ大和に誕生したか！

～新大和論の構築へむけて～

コーディネーター 小路田泰直（奈良女子大学副学長）



2016 年度放送大学学長裁量経費（学習センター支援）報告書

シンポジウムの開催にあたって

本報告書は、2016年度放送大学学長裁量経費（学習センター支援）を受け、2016年11月6日、奈良女子大学記念館講堂において開催された、放送大学奈良学習センター開設20周年記念シンポジウム「日本はなぜ大和に誕生したか！～新大和論の構築へむけて～」をまとめたものです。

「申請書」に記載した趣旨は以下の通りです。

奈良は日本という国家が誕生した地で、このことが意外と問われることがなかった。ではなぜ日本という国家が大和に誕生し、大和に育まれたのか。それを問うことは日本史の捉え方そのものを見直すことに繋がる大きなテーマである。

そこで奈良学習センターの開設20周年を記念して、「日本が大和に誕生した理由」をテーマにシンポジウムを開催して、そのテーマに取り組んで行く。

我々はこの国が大和から興ったことは知っている。しかしなぜ大和から興ったかは知らない。あるいはこの国が、日本という国号とは別に、大和という呼び名をもっていることは知っている。しかし都が大和の地を去って久しいのに、なぜ未だに国全体が大和と呼ばれているかは知らない。それを弥生、古墳、奈良、平安時代の研究者が知恵の限りを尽くして解き明かす新大和論の構築に向けて論じる。

このことにより多くの歴史的財産を有する地域の再発見や観光ボランティア等の育成に資して地域貢献をおこなう。

シンポジウムでは、コーディネーターによる問題提起を受けて、4人のパネラーがそれぞれ専門家の立場から知的刺激あふれる発表を行い、まさに新大和論構築へ向けての貴重な一歩を踏み出しました。その内容については、ぜひ本報告書をお読みいただきたいと思います。

最後になりましたが、この企画をご主導いただいた小路田泰直先生、ご協力いただいた館野和己、今尾文昭、北條芳隆、西村さとみの各先生に厚くお礼申し上げます。

2016年12月25日

放送大学奈良学習センター所長 三野 博司

目 次

報 告

「日本はなぜ大和に誕生したか」への話題提供

北條 芳隆

2-14



ヤマト王権の誕生と支配の拡大

館野 和己

15-20



都と古都・故郷

西村さとみ

21-26



古墳時代研究からの発言

今尾 文昭

27-34



討 論

35-41

報 告

コーディネーター・司会

小路田 泰直(奈良女子大学 副学長)

「日本はなぜ大和に誕生したか」というテーマを選びました。これは意外と研究されていないテーマです。日本の歴史学は実は津田左右吉という人の影響が非常に強い。この津田左右吉さんは、日本社会は他の社会に、中国や朝鮮に比べてはるかに遅れた未開社会が長く続いた。したがって文明世界のように人為的に国家をつくることをあまり考えない。おのずから、自然に生まれたとの考え方を取られたのです。それが日本古代史に非常に大きな影響をもっていますから、なぜあえてこの大和で国づくりがおこなわれたのか。そういう問題を歴史学が問うことは、これまであまりなかったと思います。

しかし、その津田さんの歴史学が誕生して 100 年ほど経って、いまだに同じことを言っているということはありませんので、今日はこういうテーマでシンポジウムをおこないたいと思います。

このテーマを振って、こういうテーマでシンポジウムをしたいので話してもらえませんかと言って、受けてくださる数少ない研究者の方々が今日のパネリストであると思ってください。したがって通常の古代史家とはかなり違った趣の先生方だろうと思いますので、聞いたうえでまたのちほど討論のときにいろいろ議論できればと思います。

北條先生と今尾先生は考古学の専門家です。館野先生と西村先生は文献の歴史学の専門家です。カバーしている時代は少しずつずれていまして、北條先生の場合は弥生や、あるいは今日は縄文まで踏み込まれるのかもしれませんが、古墳やそういう時代がご専門です。今尾先生は古墳時代の専門家です。館野先生はご承知の人も多いと思いますけれども、律令制の時代の専門家です。西村先生はどちらかというと文化史の分野です。例えば『万葉集』や『古今和歌集』について語られたら天下一品だろうと思う方です。四者四様ですけれども、このテーマについてとにかくこれまであまり議論されていなかったことを前提にして、新しい議論がここから起こることを楽しみにしています。

それではよろしく願いいたします。

「日本はなぜ大和に誕生したか」への話題提供

北條 芳隆（東海大学文学部 教授）

皆さんこんにちは、東海大学の北條芳隆と申します。パワーポイントを用意しましたので、その画像をご覧いただきながら私の話をお聞きいただければ幸いです。

私から提供させていただく話題は、実は日の出の話です。図 1 は奈良盆地の中心にある唐古・鍵遺跡から見た冬至の日の出ですが、三輪山から昇る様子をご覧いただきます（以下、図は文末にまとめて掲載）。古今東西を問わず、人間は日の出に特別な感情を抱いたはずだと思いますが、私は2013年秋から翌年の春まで、こちらの奈良女子大学にお世話になりながら、ひたすら龍王山に登り、また遺跡からの日の出や山並の情景を撮っておりました。

ところで、太陽や月の運行と遺跡の関係を考える、などという話題を縄文時代の研究以外のところで耳にする機会はずがないと思います。ただその理由は、単に弥生・古墳時代の研究がガラパゴス化しているだけなのです。

天文考古学と呼ばれるジャンルの研究ですが、かの有名な英国ストーンヘンジを舞台に3名の高名な天文学者と考古学者が関わって、1880年から太陽の運行と遺跡の軸線との関係が観測されました。その結果1964年になって、両者には深い関係があるという見解に落ち着いたのです（図 2）。夏至の日の出方位に向けてストーンヘンジの軸線は定められたことや、先史時代人は夏至や冬至の満月の運行についても入念な観測をおこない、石の配列関係に反映させたいこともわかってきたのです。以後、天文考古学という分野が確立され世界中に広まっていきました。

いっぽう日本では、最近でこそ縄文時代の研究には天文考古学的な分析が取り入れられるようになってきています。しかし弥生・古墳時代の研究者は完全無視を決め込んでいます。むしろ太陽の運行などといったノイズに惑わされるな、遺跡や遺物の内実だけを見て政治的な側面を解明すればそれで充分だ、という雰囲気依然在として優勢です。背後の山並との関係にも同じことが言えます。ですから今日の私の話は唐突に思われるかもしれません。

さらにやっかいな問題があります。それは現在の太陽の運行と過去の太陽の運行との間には少しズレがあることです。歳差現象と言いますが、地球の自転軸がコマの首振り運動のように変動していることによって過去と現在ではズレが生じるのです。そのため弥生・古墳時代の日の出と日の入りの方位はどうだったのかを計算する必要があるのですが、これが難題でした。私のゼミの卒業生に半年以上つき合ってもらって、今年の春ようやくプログラムを組むことができたのです。その結果をみますと、奈良盆地の中央は北緯34度ですが、2000年前から現在までの間で約0.33度、年間の太陽の運行は幅が狭まっています。このことを黄道傾斜角の減少とも言いますが、ここ9000年間はじわじわと縮まってきた

ます。そういうこともあって若干の補正が必要なのです。図 3 をご覧ください。白抜きの太陽が現在の夏至の日の出の太陽だと考えていただくと、2000 年前の夏至の日の出は 0.33 度だけ北に寄った場所から日の出となったはずなのです。灰色の太陽がそれです。

現在の日の出の方位や情景については、例えば Google Earth で再現することができます。さらにカシミール 3D というフリーソフトは山登り愛好者に人気の高い地図表示ソフトですが、日の出のシミュレーション機能も備わっています。重要なのはどちらも大気視差を考慮してあることで、充分活用できます。そのようにして再現された情景から、夏至の場合には 0.33 度北に移動させれば 2000 年前の日の出の情景となるのです。

もちろん実際のところ太陽には光彩がかかっていますから、肉眼で観察する限りはほとんど誤差の範囲内に収まります。ただ、これからお話するのは遺跡の位置情報との兼ね合いですから、厳密さが要求され、しかたなく先ほど申したような作業が必要になった、というわけです。

前置きはここまでとして、本日は弥生時代の唐古・鍵遺跡の重要性をお話しします。結論から申しますと、龍王山山帯からの日の出を年間の暦とした稲作農耕民の姿が浮かびあがることになるのです。

この遺跡では、2カ所から大きな建物跡が見つかっています。1つは日本最古の大型の独立棟持柱建物跡として有名で、中期初頭に建てられたものだといわれます。古相の大型建物と呼ぶことにします。もう1つの新しい建物跡は中期中頃から後半の時期になりますが、現在の唐古池の脇から見つかっています。私はこれら2棟の建物の場所にGPSを持って行って位置情報をとり、そこから弥生時代の日の出はどう見えたのかを調べたのです。

すると非常に面白いことがわかりました。図 4 に示しましたが、古相の大型建物から見たとき、紀元前 300 年の夏至の日の出は高橋山 640m ピークからとなり、春分・秋分の日の出は龍王山の 520m ピーク、現在の北城からです。また立春と立冬の日の出は巻向山付近やや南寄りのところから、そして冬至の日の出は三輪山 470m ピーク付近からとなりました。

つまり唐古・鍵遺跡の古相大型建物の中心から見たとき、東に連なる龍王山の嶺峰は日の出の山々であって、同時にどの峯からの日の出になるかを見定めることで時間の流れ、つまり暦ですね、それを測っていた可能性が高いということです。複数の峰々は二至二分や、あるいは二十四節気の指標だったといえるかもしれません。

つぎに新相の建物からはどうかというと、中期の後半ですから紀元前 1 世紀頃になりますが、様相が変わってきます。注意したいのは、この建物の外側をめぐる溝の方向です。方形区画と呼ばれる溝ですが、溝のなかから勾玉なども出てきて重視されるのですが、溝の軸線と直行する方位が正面観だったと仮定すると、正面は正しく三輪山になります。何を言いたいのかと申しますと、この頃には冬至の日の出を重視する方向に変わる、そのような様相が認められるのです (図 5)。

併せて図 6 の地図をご覧ください。5m メッシュの数値地図です。そこへ先ほどご覧

いただいた唐古・鍵遺跡の古相大型建物からの年間の日の出と、山際につくられる前方後円墳との位置関係、それから主要な前方後円墳の軸線がいったいどこを向いているかを点検して、まとめさせていただいたものです。白のラインが中心軸線になって、西殿塚古墳と東殿塚古墳は唐古池に立つと真正面の東側に見えますので極めて印象深い光景ではなかったかと思いますが、このような配置が復元できるのだらうと思います。唐古・鍵遺跡が起点になり、その後の古墳群の配列にまで影響をおよぼしていることが確認できるのです。

引き続き写真をご覧ください。図7は唐古池の脇から春分の日の出を撮ったものです。ちょうど龍王山の520mピークから日が昇ります。2000年前の日の出方位を計算して、その日時に合わせて撮ったものです。こちらが奈良盆地のその後の歴史を大きく規定する1つの軸線だと考えることができるわけです。

それがどのような形で表れたかという、龍王山の裾に築かれた「大和東南部古墳群」の中心軸になるのです。北限は天理大学の校地内にある西山古墳、南限は有名な箸墓古墳です。これら2つの古墳は、龍王山520mピークを仮想上の頂点とする二等辺三角形の位置関係ですので、龍王山520mピークを背景の頂点に据えた三角形の構図だらうと把握できるわけです。

なお西山古墳の軸線の向く先は高橋山です。図8の左上のところに現状の高橋山を登ったときの情景を示していますが、いわくつきの磐座があります。地元の方に聞くと、今でもパワースポットとして新興宗教の方々が崇める聖地なのだそうです。ただ肝心なのは、この場所のもと石上神宮の本宮だったという言い伝えが地元側に残っていることと、この山中にはヤマタノオロチ信仰が根強く残っていることです。この点も重要だと思います。

それから南の箸墓古墳ですが、纏向遺跡の調査で有名になった大型建物Dと同じ峯を向いています。弓月岳(ゆづきだけ)が示準先なのです。図8の右下のような状態になります。5mメッシュの地図なので立体的に起こすことができ、このような映像が再現可能です。

さて大和東南部古墳群の北端は西山古墳で南端は箸墓古墳だと申しましたが、2つの古墳はそのまま大阪平野部側に築かれた古市古墳群や百舌鳥古墳群の南北間の範囲を規定することになります。さらに大和東南部古墳群の中心軸であった龍王山520mピークから真西に延伸したところに伝仁徳天皇陵(大仙古墳)の後円部中心が位置するのです。

ようするに唐古・鍵遺跡からピンポイントでのみ意味づけが可能な軸線、春分と秋分の日の出の峯でした。それが古墳時代の4世紀ばかりか5世紀まで引き継がれていたわけですから、そのことの重要性に注目したいのです。

今度は西を下に、東を上にした図9をご覧ください。中心が龍王山520mピークです。この峯が中心になり、夏至の象徴の高橋山から軸線に向ける西山古墳、そして弓月岳に軸線に向ける箸墓古墳と、この両者が日の出の南限と北限を象徴するような形でつくられています。

これがその後、古市古墳群や百舌鳥古墳群に展開していくとどうなるかという、図中の網かけ部に2つの古墳群が収まるといった格好です。東から西へと、ある一定の範囲を

保ちながら延伸し、この範囲内限定で巨大前方後円墳の多くが築かれたわけですから、唐古・鍵遺跡から見た春分・秋分の日の出を中心に定めた「坐東朝西（ざとうちょうせい）」の配置です。始祖として崇める対象が東側にいて、配下の者たち、あるいはその子孫の者たちは西側から東側を仰ぐ。太陽信仰としか言いようのない軸線が前方後円墳の時代にまで維持されている。そして肝になるのは唐古・鍵遺跡だった、ということがおわかりいただけると思います。

ここまでくると前方後円墳の時代もほぼ中盤の終わり頃を迎え、前方後円墳の時代も終盤へと変遷していくわけですが、ではどうなるか。見瀬丸山古墳をはじめとして藤原京、平城京、そして恭仁京、平安京という形で、今度は奈良盆地の南側を起点に北へと都城が延伸していく展開になります。縦の軸がさきに見た東西軸ですが、最後の巨大前方後円墳である見瀬丸山古墳がつけられたところから「坐北朝南」へと展開していく。そのような格好だと理解できるわけです。2つの軸線が交差する場所も唐古・鍵遺跡だという点にも注目してよいかと思います。

では大和東南部古墳群に戻って、古代中国王朝の皇帝が執りおこなった祭りと比較してみたいと思います。

例えば夏至ですが、これは荒ぶる自然、荒ぶる神の象徴だと捉えることができます。温帯モンスーン地帯ですから当然そうなります。一方の冬至は弱まる太陽の光という形で捉えられるわけですが、この関係を古代中国、前漢の終わり頃に確定したといわれる祭りと対置させてみます。すると夏至の皇帝親祭は、皇帝が夏至のときに宮城から出て向かう先のことですが、宮城の北へ、となります。そこには北郊壇という方形の壇がつけられていて、ここでは「地鎮祭」に近い、大地の神を祀る祭りがおこなわれています。一方、冬至はどうなのか。これがいちばん重視されているのですけれども、南郊壇、あるいは南の円壇に皇帝が直々に出て行って、そこでは天の祭りをしています。

唐古・鍵遺跡を中心として見た大和東南部古墳群の情景、特に太陽の運行の北限と南限がちょうど夏至と冬至に合致するわけですし、夏至の北郊壇に相当する西山古墳は前方後円墳です。一方、冬至の南の円壇、天の祭りをするところは箸墓古墳に該当し、こちらは前方後円墳です。古代中国でおこなわれている祭りとよく似た形の空間設計が唐古・鍵遺跡を中心に、いつの時代からか、すでに形成されていたと考えるのが自然ではないでしょうか（図 10）。

今尾先生が指摘なさったことの 1 つに、西殿塚古墳・東殿塚古墳を境界として、そこから北側にしか前方後円墳は認められないという現象があります。そのあたりも今の図式と合わせてみていただければイメージがつけやすいのではないかと思います。すなわちこのランドスケープデザイン、空間設計において、唐古・鍵遺跡は明堂（めいどう）である。中国でいうと大極殿になる。そのようなランドスケープだと考えることができるのではないかと思います。

それから小路田さんから与えられたテーマの 1 つに、唐古・鍵遺跡から纏向遺跡への展

開をどう考えるのかを述べよ、という宿題がありましたので、簡単に申しあげます。

図 11 は、唐古・鍵遺跡の唐古池脇から撮ったものですが、実は巻向山の山頂と弓月岳の山頂は 0 度 49 分程度の差しかなくて、非常によく重なっています。さらに巻向山は立冬と立春の指標となったと考えられる峯にあたります。ですから纏向遺跡の大型建物群や箸墓古墳が弓月岳の山頂を向くのは、実は唐古・鍵遺跡から意味づけられた立冬から冬至にかけての冬季の象徴性、それを引き継ぐものだという可能性が考えられるのです。つまり唐古・鍵遺跡の冬におこなわれた祭りを引き継ぐ、という性格があるのだろうということになるのですが、単に季節の問題ではありません。

唐古・鍵遺跡は多重の周溝をめぐる遺跡として有名です。多重の周溝は洪水対策として不可欠なのですが、そのような溝を夏に掘ることは絶対に不可能です。地下水位の関係で冬の 3 カ月間ではないと、すぐに水が湧き出て埋まってしまうのです。ですから唐古・鍵遺跡の多重周壕は、冬の間そこに集まってきた人々が堀を掘る、という共同作業があったことを意味するのです。季節限定の一大イベントで、かつ開催期としては冬期が重視されることになるのです。

ですからのちの古墳づくりに近いような形で周りから人々を呼び込んできて大宴会をおこなう。宴会ののちには共同作業をおこなう、そのような舞台として、しかも季節限定で冬期だったという意味なのですが、そのような一大イベントの開催場所が纏向遺跡に引き継がれたのだろう、ということです。

もう 1 つ、あまり時間がないので結論だけ申します。纏向遺跡は直列配置で有名です。弓月岳、大型建物群、纏向石塚古墳、矢塚古墳と直列配置になっています。こうした直列配置の源は北部九州の吉野ヶ里遺跡にあるという話をしなければなりません。Google Earth で再現すると、吉野ヶ里遺跡の場合には有明海をはさんだ遙か遠方の雲仙普賢岳に向けた直列配置です。これを纏向遺跡のほうは真似をしているのです。

吉野ヶ里遺跡は北部九州にあって一方は有名な活火山、一方は動かない山で標高 409m なので非常にささやかな山ですが、纏向遺跡の近隣でもっとも先が尖った形状の峯は弓月岳ですから、雲仙普賢岳の代用として象徴化されたのではないかと思うのです。一方は火山、一方は非火山ですが、ご承知のとおり近畿地方は非火山地帯の典型的なところ。日本列島は名だたる火山地帯ですけれども、ごく少ない非火山地帯のなかで神奈備山信仰が醸成されるわけですから、その神奈備山信仰の正体は何かというと、疑似火山信仰にほかならない、ということになるわけです (図 12)。

では結論を述べます。唐古・鍵遺跡が弥生時代のはじめから大和盆地の真ん中に築かれ、のちの時代にも強い影響を与えたことまではご了解いただけただとしても、では、なぜ唐古・鍵遺跡だったのか。その成立の経緯を是非とも考える必要があります。この点についての暫定的な見解は次のとおりです。

ここは弥生文化が北部九州に端を発して東方へ進出していこうとする際の拠点として選ばれた可能性が高いのです。盆地の中央なので近隣一帯に水田をつくることはできません。

水田地帯は最近見つかった秋月遺跡など、もう少し山際の開発がしやすい場所に設けられるのですが、そもそも大量の種籾が必要になりますし、この地の人々に向けては、その種籾を蒔いて稲作を始めようとする気にさせるための仕組みが必要です。

おそらく北部九州から大量に稲束がもたらされ、東側の世界の縄文の民を懐柔する役割を果たすイベント性の高い場として唐古・鍵は成立した可能性があると思うのです。弥生文化が西から東へと進出してくる。その結節点としての奈良盆地の姿が浮かびあがってくる、ということです。もちろん神武東征や久米歌などの原イメージが醸成された舞台としての意味づけになります。

そういう場所は当然交通の要衝でなければなりません。唐古・鍵遺跡は瀬戸内側からも、あるいは太平洋側からもアクセスが可能であり、かつ東側へ向けてのルートを取るときにも結節点になりえました。そのことが背景をなすのではないかと考えます。ただそうは申しましても、平安京がのちに置かれる淀川水系との兼ね合いで、大和川水系を選ぶか淀川水系を選ぶのが常にネックになったはずで、西側の世界から東を見据えたとき、どちらに依拠したほうが統合的な支配や影響力の発揮しやすさに直結するのだから、淀川水系と大和川水系はせめぎ合いになった可能性があり、さしあたり弥生時代のはじめの時点では大和川流域が優先されたのだらうと思うのです（図 13）。

そして縄文文化との関わりを申します。古相大型建物は龍王山の山頂を正面観に据えていることが GPS の観測結果から確かめられます。問題は独立棟持柱建物とは何か、ということです。これは伊勢神宮や出雲大社の本殿などに引き継がれる神社建物だといわれますが、北部九州に出てくるのは弥生時代の終わり頃で、それまでは一切ない。西側一帯の弥生文化要素ではありません。

だとすると、それは縄文系の祭祀用建物であったという見解に傾くことになります。愛媛大学の村上恭通さんが指摘していることですが、この点を再度注意深く検討する必要があると思うのです。縄文系の建物をわざわざ選り稲倉に用いたとすれば、弥生系文化と縄文系文化の融合の象徴として意味づけられた可能性が浮上してくるからです（図 14）。

そして龍王山です。現在は水神さんの山となっていますが、古代においてどう呼ばれていたのか、という問題も併せて考えてみる必要があると思うのです。そしてこの点は史料に明記されています。「御諸山」であり「三諸山」なのです。しかし日本文学でも古代史でも、定説は「御諸山」・「三諸山」と書いて現在の三輪山を指すという解釈が定着しております。しかし、それは単なる誤読だろうと思います。「諸」はどう解釈しても複数形を意味する形容詞にしかなりえません。ですから、それは唐古・鍵遺跡で見つめられた二至二分の山並だったとみる必要があるのです。本居宣長よりも前の頃から「御諸山」と書いて「みわやま」と読む解釈が定着しておりますが、今回私が紹介させていただいている作業は、その単純な誤読を指摘するという意味合いもあるだろうと考える次第です。


以上、私からの報告を終わります。ありがとうございました。

図 1

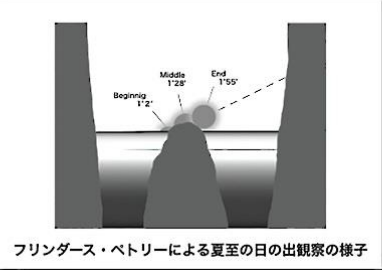


図 2

ストーンヘンジで構築された過去の日の出方位計算



After Google Earth



フリンダース・ベトリーによる夏至の日の出観察の様子

1880年、フリンダース・ベトリーが遺跡全体を詳細に測量し、東北側の入り口と軸線の角度と夏至の日の出方位を計測。「夏至の祭祀場」との風聞が西暦730年までしかさかのぼりえないことを主張 → 黄道傾斜角の測定

1901年、ノーマン・ロッキヤーがベトリーの図を利用し、黄道傾斜角の変化を推計。遺跡の造営年代を紀元前1600年と推定 → 黄道傾斜角の測定

1887年、チャールス・ダーウィンが遺跡の発掘を実施し、土中のミミズが遺物を地中に埋めることを証明 → 堆積環境と生物の作用を証明

1963年、ジェラルド・ホーキンスが立石の配列に太陽の運行と月の運行を当てはめると計測。天体観測所だと主張 → 天文考古学の確立

図 3

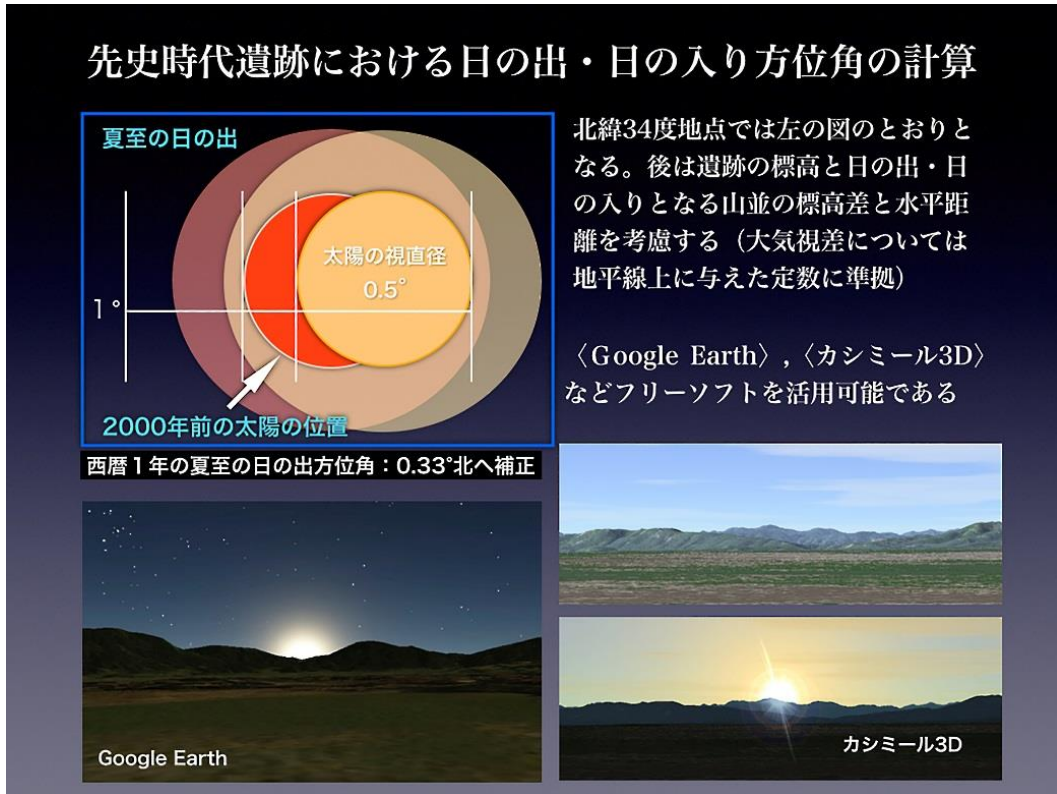


図 4



図 5



図 6

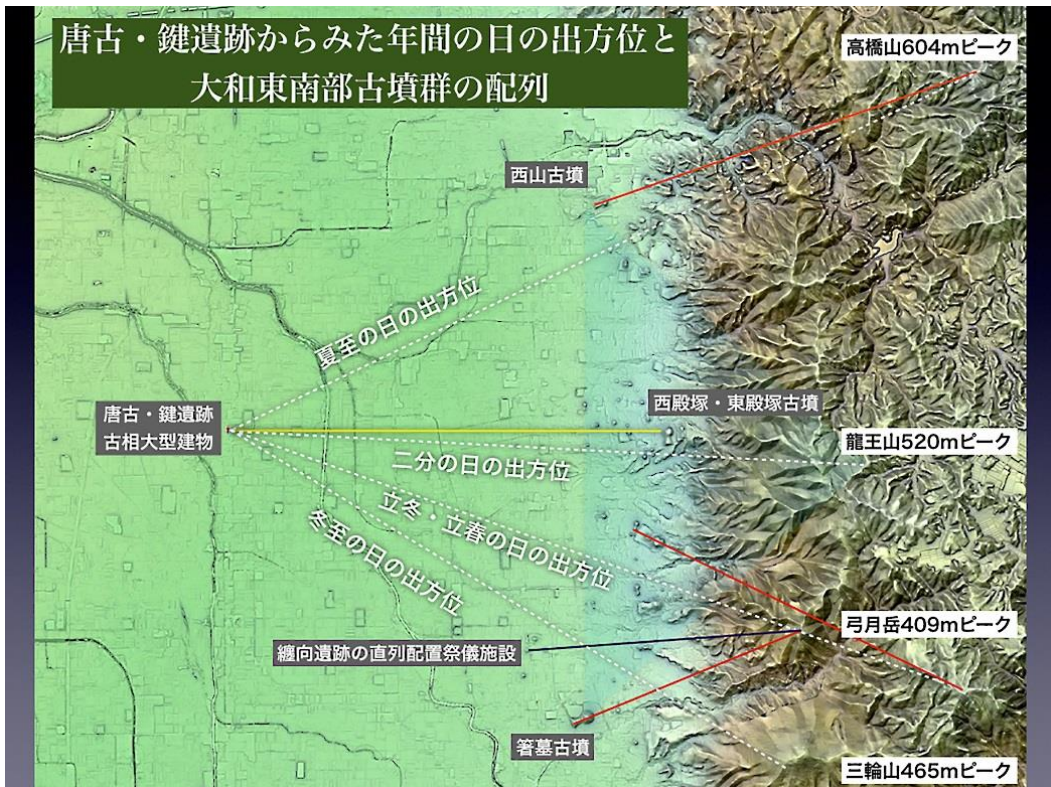


図 7



図 8

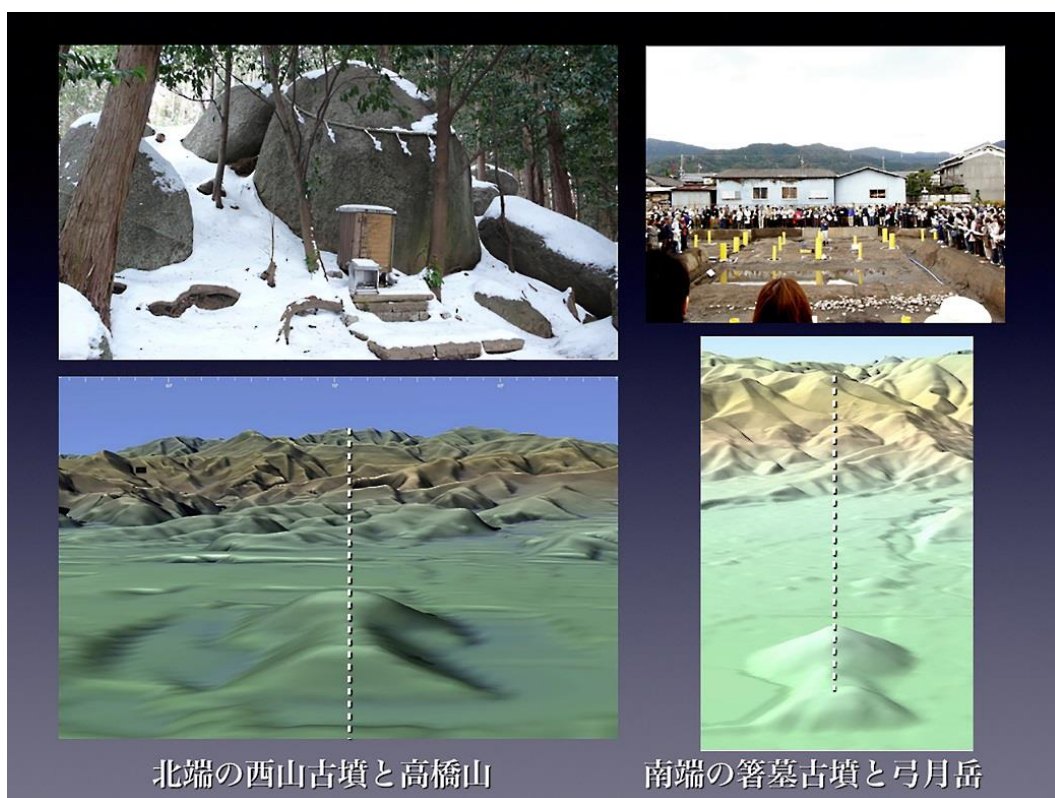


図 9

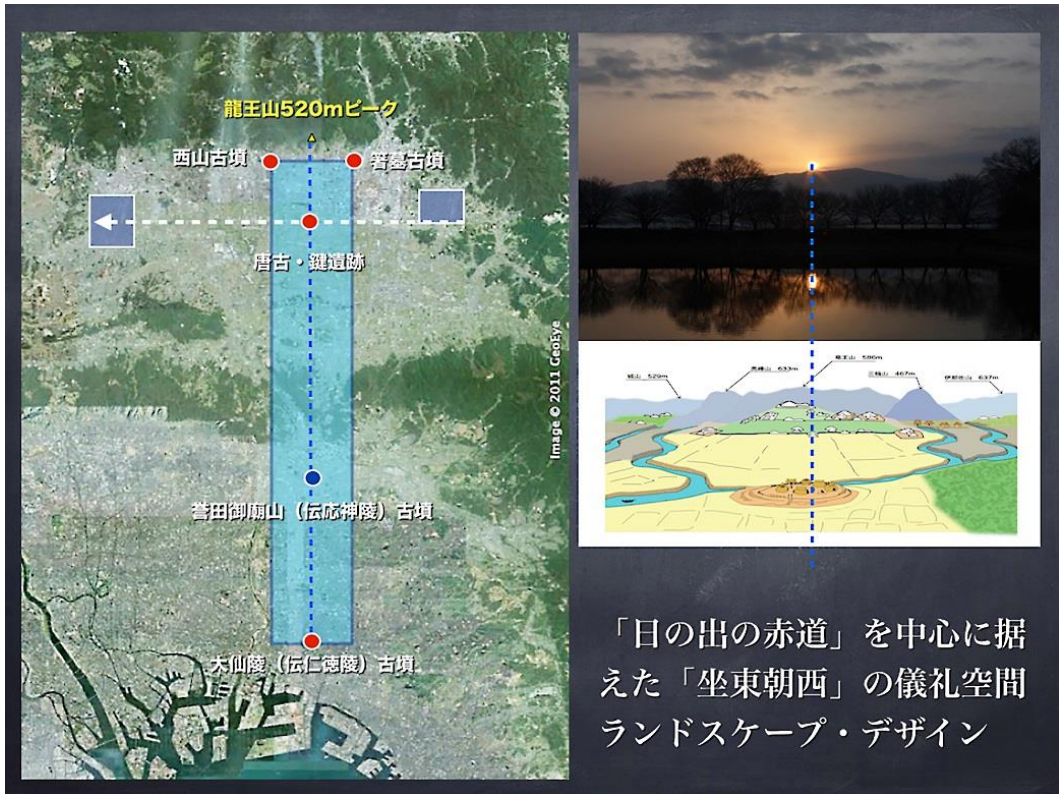


図 10

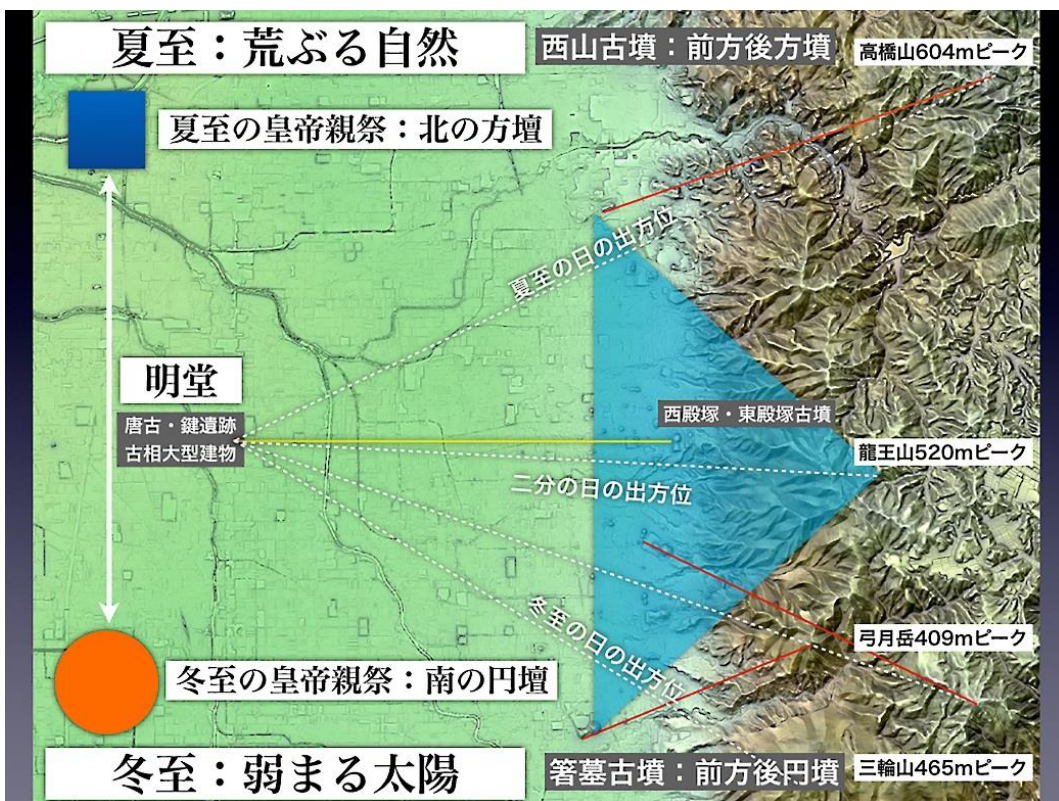


図 11



図 12



図 13



図 14

古相の大型建物は龍王山山頂を正面観に据えた

独立棟持柱建物は縄文系の「祖霊祭祀」用建造物の規格。それを稲倉に選んだとすれば、東西両文化の融合の象徴であった可能性もある。

古代において龍王山山帯はどうか呼ばれたか

「御諸山」
「三諸山」

ヤマト王権の誕生と支配の拡大

舘野 和己（放送大学奈良学習センター 客員教員）

最初に小路田さんから今回のテーマで引き受けてくれるのは、この人たちしかいないというお話がありましたが、お引き受けしたときはテーマを聞いていなかったのです。「日本はなぜ大和に誕生したか」というのは、文献史料のほうではなかなか答えられないところではないかと思えます。そこでむしろ、それよりあとの話を申しあげたいと思えます。

まず〈1 奈良盆地東南部での王権の誕生〉です。奈良盆地東南部でヤマト王権が誕生します。これはおそらく近年の発掘調査による考古学の成果からいえば、邪馬台国からの発展であろうとみていいのではないかと思っています。倭国大乱が起こるなかで鬼道に優れた邪馬台国の女王卑弥呼が共立されて、それによって奈良盆地東南部の地が倭国の中心になりました。そしてそれを継承する形でというか、それが発展してヤマト王権になっていったと考えます。それは考古学的には、前方後円墳などの古墳が築造されて全国に広まっていくことから言えると思えますし、また文献史料のほうから言えば、少し時期は下りますけれども5世紀末、6世紀初頭頃から、氏姓制や国造制、あるいは部民制・ミヤケ制などをばねにして、各地の豪族、これは国造という言葉がありますように、それぞれの国を支配していたわけですが、彼らを統合していったとみられます。

それより前の5世紀後半、雄略天皇の時代においても埼玉県の稲荷山古墳から出土した470年代の鉄剣の銘文、あるいは熊本県の江田船山古墳から出た大刀の銘文などから、国造制や部民制といったものがまだできていない時代においても、関東や九州の豪族がヤマトに上番してきて、そして特定の仕事をもって代々王権に仕えていたことがわかっています。その奉仕がより制度的になったのが5世紀末ないしは6世紀初頭頃の、氏姓制や国造制・部民制などの成立であると思っています。

これ以降、地名のことをご説明したいと思えます。〈2 地名ヤマトの概念拡大〉に入ります。ヤマト王権のヤマト、ヤマトの国、あるいは日本の国の名前としてのヤマト、いずれもヤマトですが、これはもともと極めて狭い地域の名前です。それをここでは小地名としております。平安時代につくられた『和名類聚抄（わみょうるいじゅうしょう）』という史料を見ていくと、大和国城下郡に「大和」と書いて「おほやまと」と呼ばれる郷があります。その次に書いてある「於保也万止」「於保夜末止」は万葉仮名で「大和」をどう読むかということです。『和名類聚抄』では高山寺に伝わる本、あるいは大東急記念文庫にある写本などによって、「や」と「ま」をどういう万葉仮名で書くかが違いますが、いずれにしても「おほやまと」です。そこそ小地名としてのヤマトの地でした。

最後の「止」という字は「と」と読みます。古代の日本語においては、現在のように母音が5つではなくてもっと多くあり、「と」には甲類と乙類という2つの音があつて、「止」

は乙類トです。一方、〈1 奈良盆地東南部での王権の誕生〉に戻りますと邪馬台国の「台」も乙類トで、普通は「やまたいこく」と読んでいますが、これも「やまとのくに」を表したものでしょうと考えていいと思います。

もとに戻ります。大和国城下郡に大和郷があって、また天理市には大和神社が鎮座していますが、それは『延喜式』においては「大和坐大国魂神社（おほやまとにいますおおくにたまのかみのやしる）」となっているところです。それからまた奈良盆地には国造として、盆地の東西に倭国造と葛城国造という 2 つの大きな勢力があったわけですが、その倭国造という勢力の中心もやはりヤマトの辺りとみられます。

そういうことで結局、もともとの小さい地域の名前としてのヤマトは奈良盆地の東南部、すなわち磯城や十市を中心とする地域であった。現在でいえば天理市南部、桜井市、橿原市北部などの三輪山西麓の地域であったと考えられます。ここがヤマト王権の発祥の地です。大王に直属する倭（やまと）の屯田（みた）という水田があったのですが、それもそのような地域に広がっていたと考えます。

そのような小地名としてのヤマトですが、ヤマト王権の支配が次第に拡大していくなかで、概念が拡大していきます。ヤマトの国、つまり現在の奈良県を示す大和国の名前になり、さらに現在の日本というものに相当する国の名前にも拡大していくわけです。ただし、ヤマトというのは国内向けの名前で、対外的には一貫して「倭国」、九州にいた「漢委奴国王」以来、倭国でした。このようにヤマトと倭と、内と外の名前があったのですが、王権がヤマトに誕生したことによって、倭と呼ばれていたものとヤマトとが結合していったと言えると思います。

次に〈3 奈良盆地の地勢〉です。有名な倭建命の歌が『古事記』の景行天皇のところに見えます。能煩野（のぼの）という今の三重県にある場所に行ったときに、国を思っただ歌が「夜麻登波 久尔能麻本呂婆 多々那豆久 吾衰加岐 夜麻碁母礼流 夜麻登志 宇流波斯（倭は、国のまほろば たたなづく 青垣 山籠れる 倭し麗し）」というもので、ヤマトは国のまほろばで、青垣のような山々に囲まれているヤマトは美しいと詠んでいます。ここでのヤマトは「夜麻登」という字で書かれています。「登」も乙類トを表す漢字として使われています。

この歌は、実は『日本書紀』では倭建命ではなくて、父親の景行天皇が日向で詠んだ歌ということになっています（景行 17 年 3 月己酉条）。そこでは「夜摩苔波 区珥能摩保邏摩 多々儺豆久 阿烏伽枳 夜摩許奔例屡 夜摩苔之 于屡破試（倭は 国のまほらま たたなづく 青垣 山籠れる 倭し麗し）」ということで、われわれは普通「まほろば」という言葉を使っているところが、「まほらま」となっていますが、『古事記』と同じ歌です。そしてヤマトは「夜摩苔」と書かれますが、「苔」もやはり乙類トを表す漢字です。

これからすると片方は今の三重で、片方は宮崎で詠んでいる。ここで詠まれているヤマトは大和国、今の奈良県のことだと一般的に理解しておりますが、そうではなくて直木孝次郎先生は小地名で、三輪山の麓あたりのヤマトだといわれています（直木孝次郎「"やまと"

の範囲について『飛鳥奈良時代の研究』塙書房、1975年)。「山籠れる」ということからすると、大和国全体を指してもいいのではないかと思うところです。

同じような表現は『日本書紀』の神武天皇のところにあります。いわゆる神武東征以前、まだ日向にいたときに「東に美(よ)き地(くに)有り。青山四周(よもにめぐ)れり。…余謂(おも)ふに、彼の地は、必ず以て大業(あまつひつぎ)を恢弘(ひらきの)べて、天下に光宅(みちを)るに足りぬべし。蓋(けだ)し六合(くに)の中心(もなか)か」と言います。すなわち東にある地が天下を治めるのにいい所だろう、そこは国の中心かと述べて、神日本磐余彦(神武天皇)が日向から東征に出発するわけです。

瀬戸内海を東に向かい、難波碕から川を遡って河内国草香邑の白肩の津に至ります。現在の東大阪市で、生駒山の西の麓です。そこから徒歩で龍田に向かうのですが、「其の路狭く嶮(さが)しくて、人並み行くこと得ず」、狭くて険しい道で人が並んでいくことができないため、龍田に行くのは諦めて、今度は胆駒(いこま)山を越えて中洲(うちつくに)、これは大和国に当たるわけですが、そこに入ろうとしたけれども長髓彦に敗れて退却して、太陽の子孫である自分が日に向かって、つまり東に向かって行くのはよくないとして、紀伊半島を南へ回って熊野から大和に入ってくるという筋になっています。

つまりここからは龍田山の道、いわゆる大和川添いの道は険しい、あるいは生駒山もそびえていて大和国の西の方の守りは厳しいという状況がうかがえます。

あるいは磯城に都を置いていたと伝える崇神天皇のときには、天皇の夢に神が現われて、赤い盾や矛で墨坂神を祀り、黒い盾や矛で大坂神を祀るように教えます(崇神9年3月戊寅条)。前者は今の榛原辺り、後者は二上山のほうにあります。榛原方面と二上山方面がそれぞれ大和国の東西の入口であることがわかります。さらにその翌年のことですが、いわゆる四道将軍の大彦命を北陸に、武渟川別(たけぬなかわわけ)を東海に、吉備津彦を西道に、丹波道主命(たにはのみちぬしのみこと)を丹波に派遣しますが(崇神10年9月甲午条)、これは大和国からは陸路で四方に道が開けていることを示しています。

要はこれらから言えることは、大和国は周囲を山に囲まれて防御の便はあるが、周囲と隔絶しているのではなくて、陸路で外部につながっている。さらに上には出てきませんが、大和川や吉野川、さらには木津川という水上交通の便もある。大和国は、そういういい場所であることがわかります。まさに王権が置かれるのにふさわしいところだと思います。

ちなみに『延喜式』という10世紀の史料に記された、各地から平安京までの行程を見ると、例えば武蔵からだと上りに29日、下りに15日かかります。下りが半分になっているのは、この行程は税の貢進の際の規定でして、行きは税を運んでくる時の日数なので進むのに時間がかかりますが、帰りは手ぶらなので半分の日数ですむというわけです。常陸だと上ってくるのに30日かかる。一方、西を見ると大宰府で上りは27日ほどかかる。だいたい関東から九州まで同じぐらいの日数で行ける。平安京までと大和国までは、だいたい同じぐらいの行程でしょうから、大和はヤマト王権の時代から律令制の時代まで、支配がおよんでいる列島の地域のほぼ中央に位置していることがうかがえると思います。

次に〈4 ヤマトと日本の表記〉です。『日本書紀』を見ていくと、ヤマトはいく種類かの漢字で表記されています。まず、最初の「大和」。これは今の奈良県を示す大和ですが、「倭国」と書いたり「大倭国」と書いたりもしています。それから日本を示すヤマトは、『日本書紀』では「日本」と書かれています。基本的に「日本」で統一しています。ですからヤマトタケルノミコトも、『古事記』では倭建命と書いていますが、『日本書紀』では日本武尊です。神代上の国生み神話のところでも、「迺（すなは）ち大日本豊秋津洲を生む」とありますが、「大日本」にはきちんと注がついていまして、「日本、此（ここ）には耶麻騰（やまと）と云ふ。下皆此に効（なら）へ。」というように、「日本」と書いて「やまと」と読むことが明記されています。ここでの耶麻騰の「騰」の字も、やはり乙類トです。

一方、1カ所だけ、日本のことを「倭国」と書いている箇所があります。それは天武天皇3（674）年3月丙辰条で、対馬から銀が貢進されてきたときに、「凡そ銀の倭国に有ることは、初めて此の時に（み）えたり」とあります。本来、元の史料では「倭国」と書いていたのを『日本書紀』は全部「日本」と書き改めたのですが、ここは直すのを忘れたということなのでしょう。そのようなことで『日本書紀』は、そのタイトルからして新しい表記を使っていることがわかります。

一方、奈良時代のことを記す『続日本紀』を見ていくと、奈良県の大和はこれまでと同じように「倭国」や「大和国」、さらには「大養徳国」と書かれることもあります。これは天平9(737)年に天然痘が大流行したあとで、大和国から大養徳国と名前を変えたものです。かなり無茶な読み方で、例えば今でも「養父」と書いて「やぶ」という地名がありますが、「養」が「や」、「徳」が「と」になって、「やまと」と読ませる。基本的にはもともと「倭国」と書いていたのですが、行政的な地名は漢字2文字にするという原則がつくられます。2文字にするのは、国の印鑑をつくるときの便宜にもなります。今、正倉院展をやっておりますけれども、出雲国の帳簿などがあって出雲国の印が押されています。四角い枠の中に例えば出雲ですと、2字2行で「出雲／国印」となつてきれいに収まるわけです。それによって「倭国」に「大倭国」「大和国」のように、読みには何の関係もない「大」という漢字をつけることとなります。今われわれが使っている「大和」が使われるようになるのは、奈良時代後半からです。

一方、国号のほうのヤマトはやはり「日本」と書かれる。あるいは「大日本国」とも書く。それから恭仁宮の正式名称は「大養徳恭仁大宮」と定められます。「やまとのくにのおおみや」と読みますが、恭仁宮は山背国にありますから、この「大養徳」は「日本」という意味で使っているのだらうと思います。

重要なのは、「日本」というのは、『続日本紀』で見えていくと基本的に対外的な関係のところにはしか出てこないということです。新羅などの使者が我が国のことを言う場合日本と言うわけですし、このことから「日本」とは対外的なものとしてつくられた国号だと言えると思います。ですから対外的にはそれを「にほん」と読んだのでしようが、国内的に読むときには「やまと」でした。

最後に〈5 国号・日本の誕生〉です。国の名前としての日本の誕生についてお話しします。最初に公式令（くしきりょう）という文書の様式を定めた法律を見ますと、勅命を伝える詔書では、天皇がこのように仰っていると書くのですが、そこには天皇を表す書き方に何種類かあります。

まず「明神御宇日本天皇詔旨云々。咸聞。（あらみかみとあめのしたしらすひのものとすべらがおほむごとらまとそのことそのこと。ことごとくにききたまへ）」となります。岩波書店の『律令』から読みを取っていますが、「あらみかみ」は「あきつみかみ」と読むことが多いかと思いますが、それはともかく、ここには「日本天皇」と書かれています。2つ目は、「明神御宇天皇」、3つ目は「明神御大八洲天皇」、あるいは「天皇」だけなどというように、誰に対する詔か、あるいは詔の内容によってどの表記を取るかが異なっています。そして「日本天皇」という書き方は、『令集解』という養老令の注釈書が引用している大宝令の注釈書である「古記」は、隣国・蕃国への詔の場合であると説明しています。それは外国に対して詔を述べるときに使うものでした。ですからあくまで「日本」は対外的な場面で用いられるべきものとして、701年に作られた大宝令で定められたものです。

そのことをよく示しているのが、慶雲元（704）年7月に帰ってきた遣唐使です。『続日本紀』同月1日条は大宝2（702）年に出発した遣唐使の帰朝報告ですが、粟田真人（あわたのまひと）という人が最初に唐に着いたときにそこに人が来て、どこから来た使者かと聞かれた際に「日本国の使なり」と答えているわけです。これが中国に対して最初に使った「日本国」というものです。この遣唐使には万葉歌人として有名な山上憶良も加わっていました。彼が唐にいるときに国を思いつくったのが、「いざ子ども 早く日本へ 大伴の 三津の浜松 待ち恋ひぬらむ」という歌です（『万葉集』巻1-63）。原文に「日本」とあります。普通、「早くやまとへ」と読まれています。吉田孝氏は、これは日本という新たな国号ができたその自負を込めて、山上憶良は「早くにほんへ」と読むものとして使ったのではないとも言われているところです（吉田孝『日本の誕生』岩波書店、1997年）。

あるいは10年ほど前に西安で見つかった井真成（せい・しんせい）という、遣唐使に従って行った留学生の墓誌にも、「国は日本と号し」と見えるところです。

最後に見ておきたいのは、今まで倭国と言っていたものが、大宝2年に派遣された遣唐使から日本と名前を変えたわけですが、それに応じて『旧唐書（くとうしょ）』という唐の歴史を記したもののなかには、日本のことが倭国伝と日本伝と2つに分けて書かれていることです。それまでは『隋書』倭国伝というようにみな倭国伝だったのですが、『旧唐書』では日本伝も登場します。そして倭国伝のなかには「倭国は、古の倭奴国なり云々」と、倭は昔の金印「漢委奴国王」で知られる「倭（委）奴国」以来の国だと書いています。

それとは別に日本伝というものがあって、「日本国は、倭国の別種なり。その国日辺（にちへん）にあるを以て、故に日本を以て名と為す。あるいは曰く、倭国は自らその名の雅ならざるをにくみて、改めて日本と為す。あるいは云く、日本はもと小国にして、倭国の地を併せたり」と言っています。日本は倭国の別種であるとか、日の昇る方にあるので日本

と称したとか、倭国という名前は雅でないのが気に入らず、日本に改めたとか、日本が倭国を併合したとか、いろいろな解釈を述べていて、なぜ日本としたのか中国側でよく理解できなかったことがうかがわれます。実際には日本という名前は、2番目にあるように中国から見た「日辺」、日の昇るほうにあるところからつけた名前だとみられています。

そして大宝の遣唐使がはじめて日本と名乗った。彼らが中国に行ったときには、中国は則天武后が政権を執っていた時代でした。それに関して東野治之氏が指摘されていますが、『史記正義』という8世紀にできた『史記』の注釈書のなかには、「また倭国、武皇后改めて日本国という」というように、日本国という名前は則天武后が倭国から変えたということも出てきます。中国に朝貢してきた倭が日本と名前を改めたのを、則天武后が認めたと解釈できると思います。ちなみに推古天皇と聖徳太子のときに行った遣隋使は、「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。つつがなきや」と言って隋の皇帝の不興を買ったわけです。この場合の「日出処」と「日没処」は、東と西というように対になっているのに対して、「日本」というのは一方的に自分が中国の東の辺国である、辺境にあることを認めたものであると東野治之氏は述べられているところです（東野治之『遣唐使』岩波新書、岩波書店、2007年）。

いずれにしても、このように8世紀以降、「日本」と書くことによって「にほん」という国の名前ができます。訓読みするときは「やまと」なのでしょうが、日本あるいは大和が列島全体の国の号として定着したので、その後、政治の中心が大和国から平安京などに移っても、国号を変える必要がなく、現在にいたるまで使われ続けたということになるわけです。

都と古都・故郷

西村 さとみ (奈良女子大学 准教授)

「日本はなぜ大和に誕生したか」、私もこのテーマをお聞きしたのとパネラーをお引き受けしたのとどちらが早かったのか、記憶が定かでないのですが、お受けしてからかなり悩みました。そして、困ったときはいつもそうしておりますように、過去の人たちは大和にミヤコを置くことについてどう考えたのか、まずは史料を確認することにしました。

そこで出会ったのが、先ほど館野先生もお使いになりました『日本書紀』神武天皇即位前紀の一文です。豊葦原瑞穂国（とよあしはらのみづほのくに）の統治を託された天孫は長らく「西の偏（ほとり）」で「正しきを養」ってきましたが、その徳がおよばない遠方では相互に境を設けて争う状況が続いていました。そこで神武天皇は、塩土老翁（しおつちのおじ）の談話を手がかりに東方に向かいます。天神から委ねられた大いなる業を広め天下に君臨するにふさわしいのは、天地・東西南北すなわち「六合（くに）」の中心に位置し、四方を「青山」に囲まれたところ、そして「天磐船（あまのいわふね）」から饒速日（にぎはやひ）が飛び降りた地でした。饒速日は、彦火瓊々杵尊（ひこほのくにぎのみこと）の前にアマテラスから神宝を授かり地上に降臨したといわれ、物部氏の祖ともされる神です。

確かに大和は列島のほぼ中央に位置していますが、真ん中に行くことが何ゆえ重要なのか、山々に囲まれているとはどういうことか、饒速日の伝承は何を意味しているのか、大和が統治の拠点となった理由をここから読み解くのは容易ではありません。ただ、単なるフィクション、あるいは結果論に過ぎないと片づけてよいとは思われません。ミヤコは大和にあるべきだとの認識が存したことは、7世紀後半に活躍した柿本人麻呂の歌からもうかがわれるのです。畝傍山麓の橿原に始まり、歴代の天皇が大和の地で天下を治められてきたが、天智天皇は何を思われたのか、そこを離れて「夷（ひな）」である近江の大津にミヤコを営まれた（『万葉集』巻第1-29）。本来は天皇の居処がミヤコであり、「夷」はその徳がおよばないところですから、ミヤコが「夷」にあるというのは矛盾します。しかし、人麻呂があえてそう詠ったほどに、大和はミヤコがあるべき場所でした。

そこで、やや遠回りをするようですが、ミヤコが大和を離れることによりいかなる事態が生じたのか、平安京遷都後のミヤコと大和に光をあてることにより、大和の中心性とは何なのか、いいかえれば、先ほどご紹介しました神武天皇の、人麻呂の思いのうちを探ってみたいと思います。

さて桓武天皇は、延暦3（784）年に長岡、延暦13（794）年に平安京に遷都しました。しかし、それでミヤコが山城に落ち着いたのかというと、そうではありません。桓武の没後に平城が皇位を継ぐと、即位にともなってミヤコを遷すのが慣例であるから、そのことをお考えくださいと、公卿たちが天皇に判断を求めています。どれほど現実性を帯びた進言

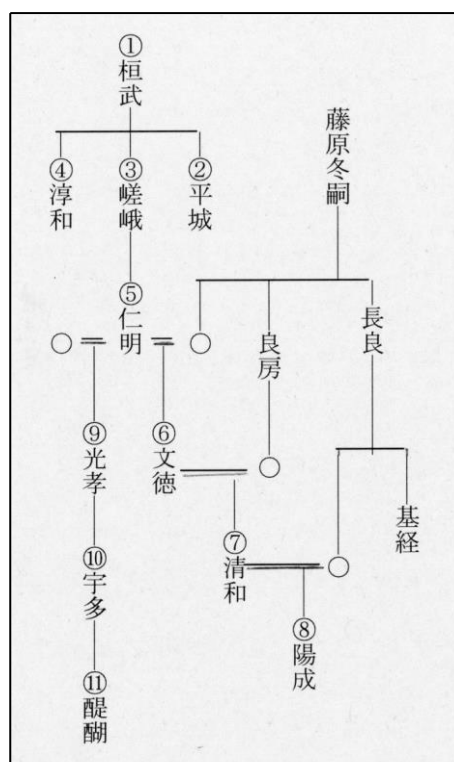
であったかはさておき、建前のうえでは、平安京に居続けることは当たり前ではなかったのです。平安京こそが永遠のミヤコであると宣言されたのは、嵯峨天皇の治世のことでした。

平城天皇は、足かけ4年で皇位を弟の嵯峨に譲り、しばらく各地を転々としたのち、かつてのミヤコ・平城に住まいし、国政に関与し始めます。そして弘仁元(810)年、平城への還都を画策しましたが、そのクーデターはただちに発覚、藤原仲成・薬子兄妹が首謀者として死を迎えました。いわゆる薬子の変、最近では平城太上天皇の変とも称される出来事です。平城はあくまで「古京」であり、平安京こそが「先帝の万代宮(よろづよのみや)と定め賜うたミヤコであるとの宣言は、その混乱の収束を企図した嵯峨天皇の詔においてなされたものでした(『日本後紀』同年9月丁未条)。

「故里となりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり」(『古今和歌集』巻第2-90)、「奈良の都」を「故里」と詠った平城上皇の想いが胸に迫るような気もしてまいりますが、在位期間が短く、寵愛する薬子にそそのかされて国政を混乱させたという負のイメージも漂うせいも、その政策に目が向けられることはさほど多くはありません。

しかし、彼は短い間にさまざまな政策を矢継ぎ早に打ち出しました。それらのなかで、前後の時代と比べて特徴的だと思われるのが、地方統治に関わる政策です。それは、ミヤコと地方との関係をどう構築するかという問題に直結しますので、そこからヤマトがいかなる場所と考えられていたのかが垣間見られるかもしれません。そして、その認識の差異が、大和の平城と平安京をそれぞれ拠点とする平城と嵯峨の対立の背景にあったとも考えられますので、その政策を追いかけてみたいと思います。

桓武天皇の治世に勘解由使が設置されたことは、高校の日本史の教科書にも記されていますので、よくご存じでしょう。勘解由使は、解由すなわち官人の交替に際して前任者と後任者の間でやりとりされる文書の審査を職務とします。その勘解由使を廃止したのが平城天皇です。平城は大同元(806)年5月、即位してすぐに六道観察使という役職を置き、閏6月に勘解由使を廃止しました。のちほどご説明しますが、観察使には参議の職にある人々が任命され、翌2(807)年4月には、彼らは参議の号をとどめられ、観察使の職務に専念することとなります。しかし、大同4(809)年に平城が退位しますと、翌弘仁元年6月、今度はその観察使が廃され、参議が復活されました。この政策は形式上、平城上皇の命によりなされていますが、新天皇が意を異にしていた様子はいかがえません。



天皇略系図

勘解由使と観察使

延暦 5 (786)	国司・郡司の勤務評定に関する 16 条を制定
延暦 13 (794)	平安京遷都 桓武天皇
延暦 16 (797) ?	勘解由使を置く
延暦 22 (801)	「延暦交替式」(国司交替に関する諸法令を収載) 奏上, 施行
大同元 (806)	5 月 平城天皇即位
	5 月 六道観察使を置く
	閏 6 月 勘解由使を廃する
大同 2 (807)	4 月 参議の号をやめ, 観察使とする
大同 4 (809)	4 月 嵯峨天皇即位
	12 月 平城太上天皇, 平城に遷御
弘仁元 (810)	6 月 観察使を廃し, 参議の号を復す.
	9 月 薬子の変 (平城太上天皇の変)

勘解由使の職務についてはすでに述べましたので、ここで観察使の職掌を確認しておきたいと思います。観察使とは、五畿七道という行政区画ごとに置かれ、参議が就任した令外官で、国司・郡司の執務状況の監査や民情視察の任にあたりました。参議はその名のおり、左右大臣や大納言とともに国政について議定する官職で、視察の結果をもとに地方政治の問題点を指摘し、しばしば重要な提言をおこなったことが、正史『日本後紀』に記されています。『日本後紀』には観察使の設置にいたる経緯も述べられており、そこには、延暦 5 (786) 年に国司・郡司の勤務評定基準の作成が命じられ、16 条にわたる諸事が制定されましたが、それらが実行されていないため、観察使を置いて善悪を明確にし、愚かな者を誡めて賢明な者を重用する、などとあります。

観察使の設置は、平城天皇が「手づから詔し」た、事務担当者が書くべきところを天皇がみずから記したとありますように、思い入れの強さをうかがわせる政策でした(『日本後紀』大同元年 6 月壬寅条)。しかし、設置の経緯をみますと、前提にある政治課題についての認識は桓武天皇と平城天皇で異なっていたわけではなく、深刻な税収不足、諸国から税が入ってこないという事態を国司・郡司の怠慢によるものとみなし、それへの対応をめぐる模索が続けられていたのです。

ただ、おおまかにいえば、勘解由使の設置は行政を国司に委ね、書類審査により国司を監察するという間接的な統治を志向するもの、他方、観察使は官吏を各地に派遣し、中央で実情を把握して政策を立案するという直接的な統治を志向するものと、両者は方向性を異にしていました。後者のほうが、議政官クラスの人々が地方統治に直接関与しており、より理想的なありかたのようにもみえますが、迅速な対応ができない、中央の意向を押し付けることになりかねないなどの問題点を抱えています。それに対して、前者はある意味では統治を「放棄」するかのようですが、地域の課題を地域に委ねることにより、現実に

即した政策の実現への途を拓くことにもなりえます。現在の政府と地方自治体に置き換えますと、このような形が望ましいと簡単には言えないことをご理解いただけるのではないかと思います。

いずれにしましても一長一短ありますが、平安時代を通じて地方政治のありかたは前者の方向に進展していきます。平城天皇が観察使を設置したのは大和においてではありませんが、彼が選択した政策は、お父さんの桓武天皇ではなく、そのお父さん、平城からいと祖父にあたる光仁天皇のそれに近いものでした。大和にミヤコがあった時代の中央と地方との関係は、乱暴を承知であえて言えば、天皇のもとで立案された政策が統治圏内にあまねくおよぼされる、全国一律という意味での平等性を志向するものでした。神武天皇が目指した「六合の中心」としての大和とは、そうした統治の場の象徴的な表現であったのかもしれない。

ところで、地域のことはその地域で解決するという政策は、ミヤコと地方の、あるいは地域間の格差を生じさせるという負の側面も有しています。それは、境を設けて相争っていると神武天皇即位前紀に記されたような、分裂の危機をはらんでいるということです。そうした危機に際して、ミヤコの求心力の強化をはかるかのように、平安期には、文化的価値を帯びたミヤコ意識を育む政策が出され、また言説が生成されていきました。

寛平3(891)年には、五位以上の貴族および孫王が自由に畿内を出ることや、平安京に戸籍をもちミヤコの構成要素となっている人々が畿外に居住することなどを禁止する太政官符が出されています(『類聚三代格』巻19所収同年9月11日付太政官符)。法の実効性はさておいて、ミヤコとそれを取り巻く畿内、その外に広がる地域とを差異化する政策と言えるでしょう。こうした政策のうえに、私たちがよく知るミヤコとヒナの関係、洗練された文化の発信地であるミヤコと田舎びたヒナという、価値序列を帯びた都鄙意識が醸成されることとなりました。

しかし、その一方でと申しますか、あるいはそれゆえでしょうか、大和は忘れてはならない記憶の場として語られるようになり、先ほどの太政官符を出させた宇多天皇は譲位後に大和に赴き、また畿外にも出向いています。残された時間は多くはありませんが、そうした大和をめぐる為政者たちの言動について考えてみたいと思います。

宇多天皇について簡単にご紹介しておきますと、系図をご覧いただければわかることですが、彼は皇位からは遠い位置にいました。しかし偶然が重なり、父が即位したことからそのあとを継ぐこととなったのです。それも、父光孝が即位時にみずからの子孫に皇位を継がせる意思がないことを表明するためであったのか、子息を臣籍に降下させたため、宇多には源姓を名乗っていた時期がありました。つまり臣下から天皇になるという、異色の経歴をたどることとなったのです。それゆえにか、彼は新たな君主像を模索し、十分に政務をおこないうる状態で醍醐に譲位し、ほどなく出家、法皇を称して大和の寺々や熊野に詣でました。

その早い時期のものが、昌泰元(898)年10月の宮滝御幸です。交野から大和に向かい、

法華寺や平城の旧宮、現光寺、現在の大淀町の世尊寺境内にあったお寺ですね、それらに立ち寄りながらの旅でしたが、その主眼は宮滝を訪れることにありました（『扶桑略記』同年10月25日条など）。宮滝は、皆さまご存じだと思いますが、現在、吉野町に宮滝という地名があり、縄文時代以来の遺構が重なっている複合遺跡が存在します。皇位を継いでほしいという天智天皇の依頼を断った大海人皇子、のちの天武天皇が一時期住まいし、壬申の乱に勝利したのち、皇后や皇子たちと訪れた吉野宮の候補地ともなっているところです。夫のあとを継いだ持統天皇は在位中30回以上も吉野宮に出かけており、随行した柿本人麻呂が、多くある国々のなかでもとりわけ山川が清らかである、「滝のみやこは見れど飽かぬかも」と詠っています（『万葉集』巻第1-36）。

人麻呂は「滝のみやこ」と表現しましたが、「宮滝」とは称していません。実は「宮滝」という名称がはじめてみえるのが、この宇多の御幸なのです。持統天皇に続いて文武、元正天皇や聖武天皇も吉野宮を訪れましたが、8世紀なかば以降、行幸は絶えていました。そうしたところになぜ宇多はわざわざ行ったのか、本当はそれを明らかにしないといけないのですが、今日までに答えを出すことができませんでした。ただ、その記録が菅原道真の手になるものであったことも影響しているのか、宇多の御幸は室町期にいたっても顧みられるほどにしばしば想起され、宮滝の名称も定着していったのです。

この御幸に際して宇多が龍門寺を訪ねたことも記憶されるべき出来事であったらしく、治安3（1023）年、藤原道長が高野山に詣でる途中で立ち寄ったときの記事には、かつて宇多法皇が和歌を奉り、今、道長が5,000もの燈を奉った、「今を以て古を思ふ」とあります（『扶桑略記』同年10月19日条）。龍門寺は吉野町にかつて所在した寺院で、龍門の滝を中心に、山のなだらかなところを削ってつくられました。『今昔物語集』に、当寺に籠居していた安曇仙と久米仙らの逸話が載録されていますように、修行の場でもありました。

宇多法皇は、このあと大峰山に入峰したとも伝えられています。時代が下ってからまとめられた金峯山寺の縁起にみえることですので、これまで信憑性が薄いと言われていましたが、近年は事実とみてよいのではないかとの意見もあります。また、大和から外れますが、延喜7（907）年には熊野にも詣でており、院政期に盛んになります上皇の熊野詣の先例を築きました。なぜ宇多が、私たちが修行の場と認識している山中の社寺に参詣したのか、それもまた十分な解答が得られていません。ただ、冒頭にご紹介しました神武東征伝承のなかにも、大和は山々が周囲を取り巻く地であると述べられていました。そして、これからお話しします『日本書紀』の講書においても、山が重要な意味をもって語られています。

9世紀から10世紀なかばにかけて、史料に確認されるものに限れば6度、朝廷で『日本書紀』の講書がおこなわれました。その覚書きのようなものが、鎌倉時代に『釈日本紀』という書物に編纂されたのですが、そこに次のような問答が載録されています。まず、弘仁年間、嵯峨天皇の治世に開かれた講書の記録です。「日本」と書いて「ヤマト」と読むのは音読でも訓読でもないので、文字どおり「ヒノモト」と読んではどうかとの問いに、先生は「山跡の義」をもってそう読み続けてきたのであるから、たやすく改めるべきではな

いと、理にかなわない答えを返しました（『積日本紀』巻第16 秘訓）。また、醍醐天皇の時代には「山跡（山戸 やまと）」について、この世界ができたばかりの頃、人が山に住んでいたからである、地面がまだ乾いておらず人は山に住んだため、山に生活の痕跡が残ったからである、などと述べられています（『積日本紀』巻第1 開題）。そして、そのように山に居住したのは大和国の人のみであるとも語られているのです。これまで、神武天皇即位前紀の「青山四周（よもにめぐ）れり」を、ああ、確かに奈良は山々に囲まれていると読み流してきましたが、山とは何なのかを、人々の生活の次元においても、宇多法皇たちが訪れた宗教的な場という次元でも、もっと考えなければならぬと思ったりしました次第です。

「日本はなぜ大和に誕生したか」、この問いの周りを廻っているうちに、与えられた時間を費やしてしまいました。ただ、大和を離れて平安京が造営されミヤコと諸地域の格差が広がるのと表裏一体であるかのように、大和が想起され、そこを為政者たちが訪れたという状況は見て取れたと思います。そして、その傾向を促進したともいえる宇多法皇、彼が山に入ろうとし、それは院政期の上皇たちの社寺詣につながっていきます。その山について考えることの重要性も見えてきたような気がします。ようやくスタートラインに立ったに過ぎない拙い報告をお聞きいただきまして、どうもありがとうございました。

古墳時代研究からの発言

今尾 文昭 (関西大学 非常勤講師)

はじめに①巨大前方後円墳は「大和」に成立したことを皆さんは、ご存じだと思います。また、②律令国家は「大和」に成立したことも当たり前のことですから、日本が「大和」に誕生したのは必然だということを出発するわけです。この①と②のあいだのことを、古墳時代の研究者として考えてみたという報告です。

図1を見てください。先ほど北條先生が大和東南部とおっしゃいました奈良盆地東南部の古墳群です。なじみの言葉でいえば「山辺の道」にある古墳群です。ここには大きな古墳があつて、小さな古墳がある。例えば墳丘全長 286m の箸墓古墳、240m ほどの西殿塚古墳、そのような巨大前方後墳もあれば、西殿塚古墳の東側の東殿塚古墳、これは 175m ほどです。

「大・中・小」の大きさがあります。古墳は、権力の構造を目で見てわかるよう墳丘の大きさによって表したものだと思います。大きな古墳群はその集合体です。

古墳時代の研究者は、こういった古墳群の状況について、規模の違いによる階層的な三角形を頭に描いて分析してしまうものです。その手段として、古墳の編年研究がありますが、これは築造の前後を整序するためにおこなうもので、実のところは本意に反して、それが細かく進むと、しばしば「あれ」「これ」の前後がつかなくなってきました。もちろん、埋葬される日

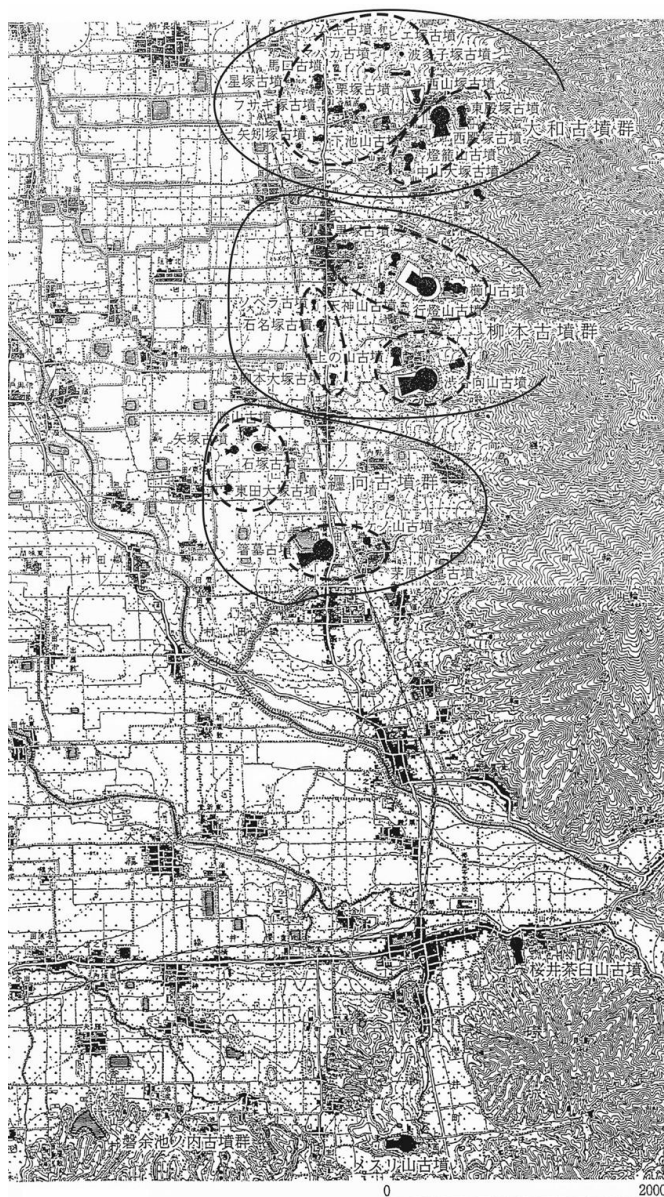


図1 山辺・磯城古墳群の分布
—大和・柳本・纏向古墳群と桜井南部—

が一緒ではないのですが、政権運営に関わった年月は一定重複しているのでしょうかから、社会のヒエラルキーを指摘するのでなければ、政権は三角形ではなく、台形の構造をイメージして語ったほうがいいのではないだろうかと考えています。

古墳時代前期の権力構造は台形です。図 2 は「山辺・磯城古墳群の群構成」と書いています。このうち大支群の大和（おおやまと）古墳群は、舘野先生がおっしゃられた平安時代の『和名類聚抄』の「大和（於保夜未止）」郷の範囲に含まれます。立地や分布形態から萱生（かよう）小支群と中山小支群の 2 つの小支群に分けて考えるのが良いと考えます。中山小支群には西殿塚古墳があります。その南には大支群として柳本古墳群、そのなかの柳本小支群に行燈山古墳、それが立地する丘陵の先には三角縁神獣鏡が大量に出土した黒塚古墳があります。さらに谷を隔てた南側に大支群の柳本古墳群のうちの渋谷（しぶたに）小支群に渋谷向山古墳、少し離れて大支群として纏向古墳群、その箸中小支群にはご存じの箸墓古墳があります。さらに離れた桜井市南部域では、初瀬川と寺川支流の栗原（おうばら）川をはさんで桜井茶臼山古墳、その西南方の寺川沿いにメスリ山古墳があります。いずれも墳長 200m 超えの大形前方後円墳です。

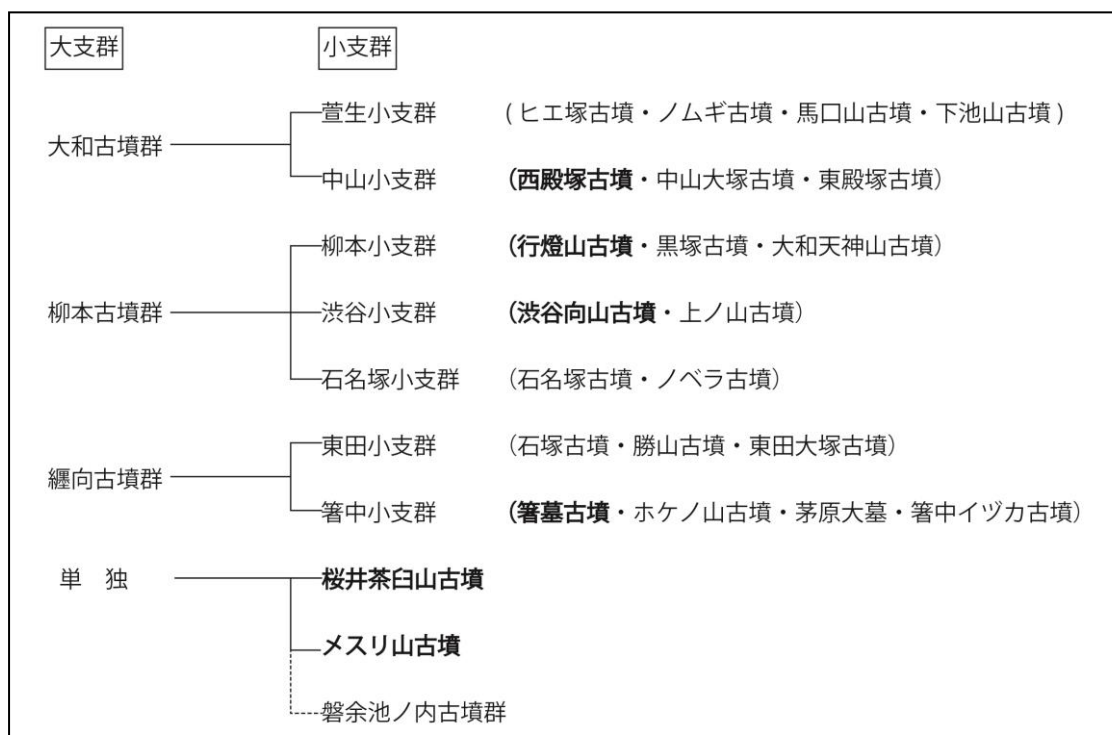


図 2 山辺・磯城古墳群の群構成

さきほども触れました。考古学では、編年を細かくして前後を見極めるという作業をしますが、実際にはこれらの古墳に眠る被葬者が同時期に同じ政治権力の維持運営に関与したことがあったのだろうと私は、見えています。ついては、古墳編年によって導かれた新旧を一世一代と読み換えることに、あまりにもとらわれ過ぎると、古墳時代前期の政治勢力

の本来の構造が見えなくなるのではないかと思います。政権内の職掌分担の可能性やそれを構成するより小さな地域による集団単位などが、もっと追究されてもいいのではないかと考えています。佐紀古墳群についても同じようなことを言いたいのですが、今回は省略します。

古墳時代前期には、奈良盆地の東南部、北部、西南部の諸勢力が権力構造の可視化の結果として大古墳群を形成しました。権力の運営維持の「成功の証し」です。

図 3 に近畿中部の大古墳群を載せています。奈良盆地東南部の山辺・磯城、ご当地に近い佐紀古墳群、そして西南部に馬見古墳群、また大阪の百舌鳥古墳群、古市古墳群。前期から中期へと大形古墳は移っていきます。3世紀後半頃から4世紀後半まで前期が続き、そして5世紀につながります。上の権力構造の可視化の成功を継受していったことには意味がある。もちろん、それが一系かどうかは別に考える必要があります。私は一系列の王統からなるとは思っておりませんが、今回は触れません。

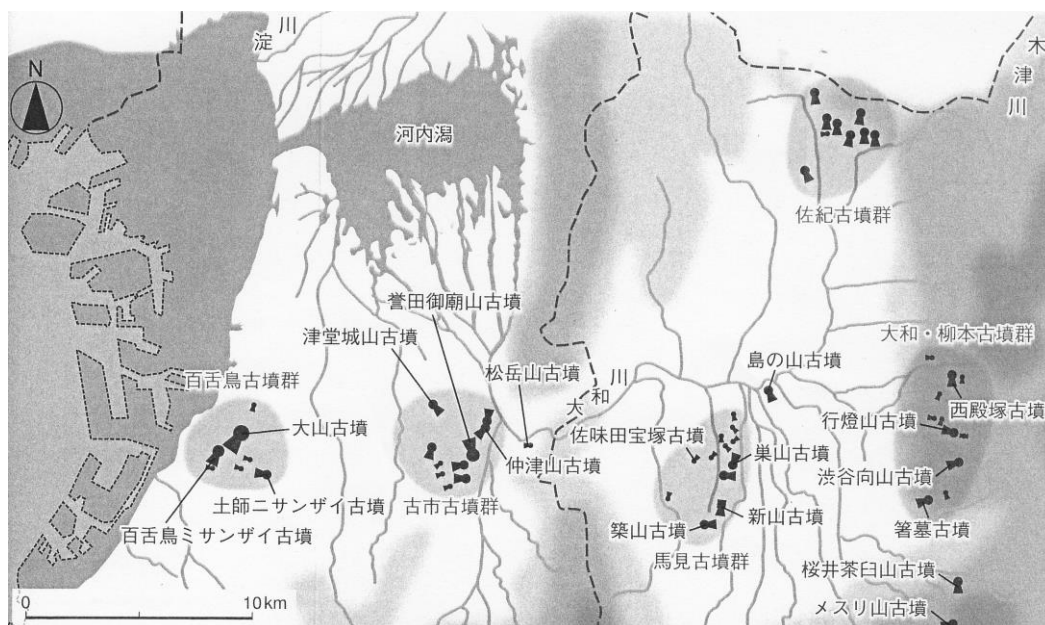


図 3 近畿中部の大古墳群—山辺・磯城、佐紀、馬見、百舌鳥、古市古墳群—

権力構造の可視化の大舞台が、すなわち大古墳群です。大古墳群の定義は①巨大性です。古墳は大きい。もう1つは先ほどからいっておりますが大中小があつて、②階層性がある。それから③集中性があるということです。たとえば山辺・磯城では8kmほどの間にかたまって営まれています。そして④継続性です。一定の期間、一世代、二世代、三世代、四世代ほど続くでしょうか。四世代×20年として80年以上、つまり100年は継続した大古墳群の営みであります。大和、柳本、佐紀、馬見、百舌鳥、古市です。なかでも佐紀古墳群は150年間にもおよぶのではないのでしょうか。至近の各集落からは、いくつもの「累代の古墳」が確認できる。人々は毎日の暮らしのなかで、仰ぎ見ることとなります。

より重要なことは、上の①・②・③・④ではなく、それらが積み重なっていくことです。可視化された大古墳群の営みはずっと累積する。古墳は、いったんつくってつぶすわけではありませんからその結果は累積していく。そのようなことが古墳群を考えるとときには重要だと思えます。権力の可視化が継続する。それが継続したということは権力の維持が安定的に成功した。さらに、それが累積する。成功の起点、つまり「ご先祖さんはどれか」ということになりませんか。考古学で血縁を証明するのはなかなか難しいのですが、大古墳群の形成は、同族性を醸成する効果があったらろうと想像します。次世代から見れば、大古墳群における各期の古墳の累積は「ご先祖さんたち」のいわば安定した秩序の証しとなるわけですから。

ところが、5世紀代の「倭の五王」の時代、421年頃から478年頃までの間、倭は東アジア社会の緊張のなかで、国際的地位の安定を得ようと中国の劉宋に朝貢します。それは対外的には中国王朝の秩序に入るという意味がありますが、倭国における内的な意味としては、例えば438年に倭隋ら13人が併せて叙正され、451年には23人に將軍号と地方行政官となる郡太守号が叙正されます。国内的な状況のなかで、先ほど申しましたような古墳築造による秩序が維持できなくなってきたがために、新たな秩序を用意したいというようなことを百舌鳥・古市古墳群を築いた人たちは考えたのだらうと、私は見ているのです。

前方後円墳は膨張します。究極は堺市の大山古墳です。墳長486mは、周辺の古墳を圧倒しています。築造時期の差はありますが大枠で捉えると、ナンバー2は複数あり、古市古墳群の市野山古墳が墳長230m、佐紀古墳群のウツナベ古墳が墳長255mないしはヒシヤゲ古墳が墳長219m、そして三島地域の太田茶臼山古墳が墳長226mとなり、のちに「畿内」となる近畿中部では、5世紀なかばにも巨大性による序列化の秩序は保たれているようです。一方、同じ頃の吉備では、造山古墳が墳長350m、作山古墳が墳長286mとなり、近畿のナンバー2の位置にある古墳を軒並み凌駕します。その吉備ですが造山・作山がある備中（南東部）に対して、備前（東部）では両宮山（りょうぐうざん）古墳が墳長206mで築かれ、二重周濠を持ち、しかも周囲に複数の陪塚を配置します。より大きくする「荘厳化」の方向と、帆立貝形前方後円墳の存在に典型的な墳丘を「規制化」という二つの方向で保たれてきた前方後円墳を中心とする秩序の限界が、露わになっていたのではないのでしょうか。先にも触れましたが、その解決策としての意味が倭国王の珍が求めた「倭隋」ら配下13人への叙正（438年）や倭国王の済の「安東將軍」号に併せての23人への叙正（451年）にはあったと、私は理解しております。

でも、それから70年あまりを経てとうとう近畿中部の政権は、大きな矛盾に直面しました。527年に勃発した「磐井の乱」です。図4をご覧ください。考古資料が示す磐井の連合領域です。「有明首長連合」ということばを、九州の柳沢一男先生が提唱されています。図は、その著作によっています。以前は「石人石馬文化圏」とでも言っていましたが、有明海を中心とする北部九州で、阿蘇の溶結凝灰岩という柔らかい石で、形象埴輪に出てくるような造形を埴輪も持っていますから埴輪の代わりそのものでもないのですが、首長たち

において文化的に共有する拡がりがあった。それは何も磐井の時期ではなくて、もう 1 世紀ほどさかのぼって 5 世紀代から、古いものでは竹島 3 号墳です。熊本市の南東の島につくられた古墳です。ここでは、高さ 68cm の大きさに、阿蘇溶結凝灰岩で三角形の鉄鏃を形象したものが出てきました。4 世紀の終わり頃から 5 世紀のはじめ頃に、そういった文化的特徴が強烈に出てきます。また、図 4 にもあがる中期の石人山古墳では、普通は石棺の上から被葬者を入れますがそうではなくて、横に口があってそこから被葬者を納める。これも阿蘇の溶結凝灰石の横口式家形石棺です。これも石製表飾の分布域に重なります。有明海沿岸を中心に北部九州では、このような文化的な共有性がある。それも 5 世紀代から見られる。文化的領域と政治的領域はイコールではありませんが、文化のおよび歴史的に結びついた地域が、やがて磐井の軍事、政治における勢力圏として現われます。

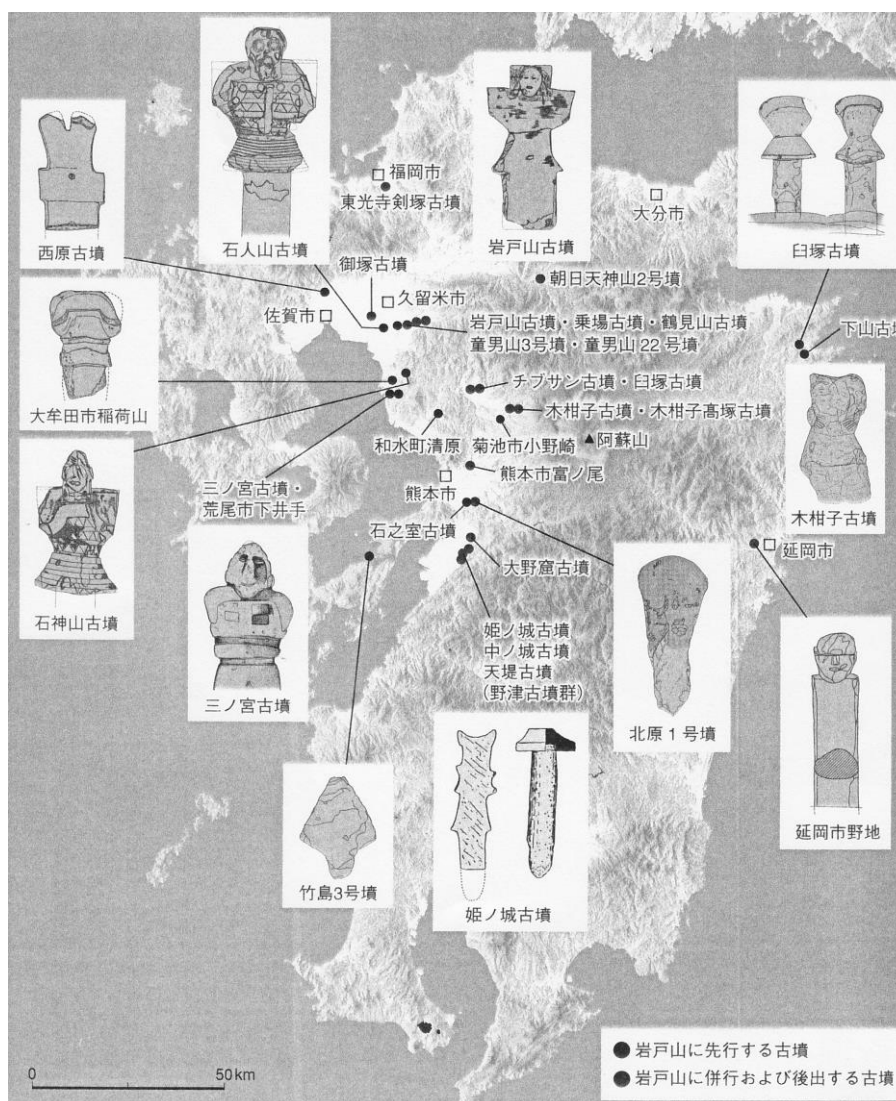


図 4 九州の石製表飾出土古墳および採集地

十分に分析できていませんが、磐井の勢力の根幹の地は、久留米市南方の八女地域にあるようです。大古墳群とは申せませんが、やはり古墳群を営むことで権力構造を可視化しました。細かくは八女のグループ、広川のグループに分かれ、東西 12km ほどの間に「磐井」以前の勢力の存在が覗えます。磐井の勢力圏が顕わに見えるのは、館野先生がご専門のミヤケの話です。



図5 「安閑紀」の屯倉推定地と関連遺跡

図5の「安閑紀」の屯倉推定地

と関連史跡をご覧ください。福岡県の玄界灘に面したところに鹿部（ししぶ）田淵遺跡という遺跡があります。ここの鹿部田淵遺跡では、三本柱の柵列に倉庫が出てくる6世紀代の建物が見つかっています。これは磐井の子という葛子（くずこ）が献上した、糟谷屯倉（かすやのみやけ）の施設の一つではないかと見られています。

したがって、6世紀前半に磐井が主導した有明首長連合は、本拠地の八女およびその周辺に留まることなく玄界灘沿岸にもおよんでいる。さらには朝鮮半島南部にもおよんでいるのではないかと推測される。采山江流域の新徳古墳という前方後円墳の石室が典型になるのでしょうか。今、韓国で15基ほどでしょうか、前方後円墳が見つかっていますが、韓国の前方後円墳の埋葬施設は、近畿型の横穴式石室ではなく北部九州型ないしは肥後型を元にした石室です。つまり、近畿よりも直接的には北部九州一帯の勢力と、どうも関係していた。すると、磐井が、乱を引き起こしたのも一時の出来事ではなく、少し範囲を大きく、時代も長く考えてみないと解けないのではないかと考えています。

6世紀のはじめに磐井の乱が起きる「時の政権」が、ヲホド王の政権です。継体大王です。継体大王の登場で、冒頭に述べました大古墳群の営みは止みます。累積はこれで中断です。これは大きな変化だと思います。図6をご覧ください。三島地域の「前方後円墳集成」にもとづく編年の9期にあたります。これがヲホド王の古墳と見られる今城塚古墳です。もはや、ここに大古墳群をつくることはありませんでした。しかも重要な点は、淀川の北岸です。大王墓を百舌鳥や古市古墳群には大王墓をつくらないという変化が見られています。

古墳群の形成は、その累積に関わった集団間における同族性が育まれ、それが血縁による秩序にまとめられて、なかでも大王は血縁にもとづいた、さらなるカリスマ性が求められる。ヲホド大王の太后のタシラカノの墓は、今、宮内庁は西殿塚古墳としていますけれども、帰属する時代としては無理で、その西側の西山塚という古墳があり、それがタシラカノの墓だろうと言われていています。山辺・磯城地域に「オオキサキ」の墓をわざわざ造営し

たのは、この血縁性の継承を意識したからではないかと想像しています。

その後、大王墓は「大和」へ回帰します。宮の方も回帰します。大古墳群の造営は停止する。私などは、本当はこのあたりで古墳時代を終りとした方がいいのではないかと考えています。本来の意味、つまり前方後円墳を中心とする大古墳群が近畿中部で築かれたのが古墳時代であり、それは5世紀末頃までで、それ以降は異なるという時代区分をしてみたら、従来とは違う歴史理解が生まれるのではないかと思います。

どうして、こういうことが起きたのかということですが、そこはやはり先ほどから申し出ておりますが、血縁カリスマ発祥の土地、つまり古墳群の累積の起こりは奈良盆地東南部の山辺・磯城地域にありましたから、ご先祖様は奈良盆地で権力の継受に「成功したのだ」という神話が創られて、それに従って「大和」に回帰する。そういった意味でタシラカ墓の造営は、先駆けです。王墓も戻ってくる。宮も戻ってくる。これが『古事記』『日本書紀』に、「大和」が国の中心として叙述されたという答えです。

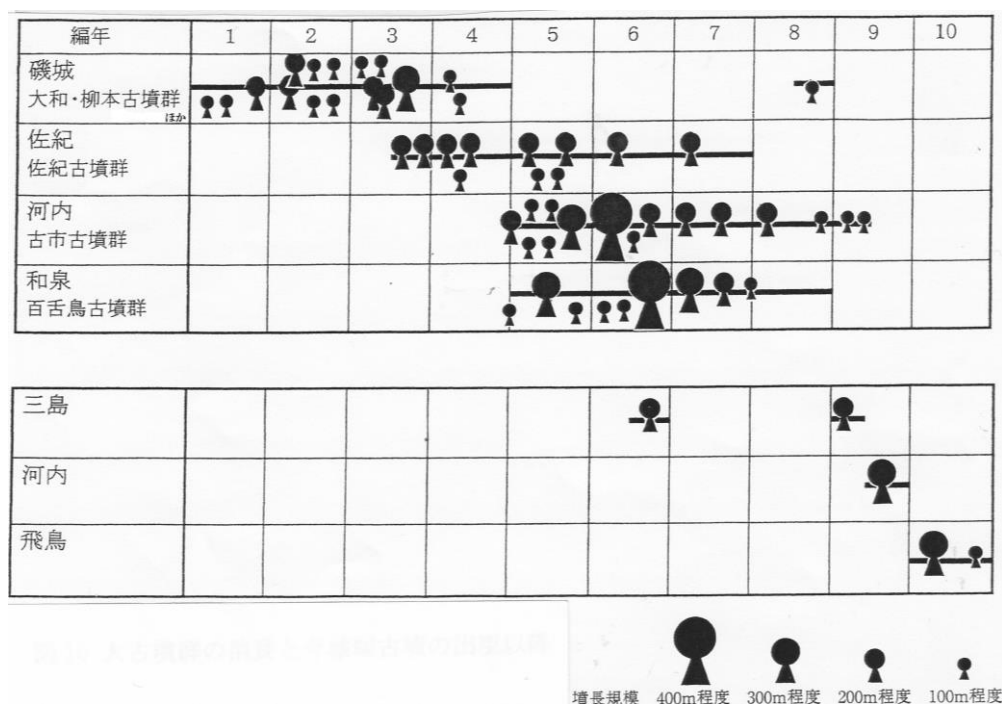


図6 大古墳群の消長と今城塚古墳の出現

とはいえ、4つの課題をまとめて挙げておきます。元も後もなくなくなってしまいますが、①そもそも、前方後円墳はどのようにして大和に出現したのか。②どうして古墳時代の政権は、ほぼ当初から権力構造の可視化を古墳群という形で表現したのか。また、どうしてそのようなことをめざす必要があったのか。でも、結果は5世紀代まで成功。③ヲホド大王は、なぜ百舌鳥や古市に自身の墓をつくらなかったのか。累積の意義には、限界と矛盾が起きつつありました。④どうして律令国家は、大王墓の時系的営みを知り得たのか。つまり、王統譜の成立がいつか。

なお、のちほど律令国家は、巨大前方後円墳を律令期には陵墓に編成していきます。陵墓の配置を見ていると河内と大和が同数です。実際の配置とは違ってバランスよく、ほぼ同数配置することもあります。律令国家は、大和・河内の大古墳群の存在を前提に偏ることなく陵墓を決めています。

もう終わらなくてははいけません。あと 20 分ほどシンポジウムをするようですので、私の話は中途半端なものですが、これで終わりたいと思います。

〔図出典〕

- 図 1 今尾文昭『古代日本の陵墓と古墳 1 古墳文化の成立と社会』青木書店、2009 年、より作成。
- 図 2 今尾作成。
- 図 3 今尾文昭『ヤマト政権の一大勢力・佐紀古墳群』新泉社、2014 年。
- 図 4 柳沢一男『筑紫君磐井と「磐井の乱」・岩戸山古墳』新泉社、2014 年。
- 図 5 柳沢一男『筑紫君磐井と「磐井の乱」・岩戸山古墳』新泉社、2014 年。
- 図 6 今尾文昭「天皇陵古墳の実像」広瀬和雄編『季刊考古学・別冊 14 畿内の巨大古墳とその時代』雄山閣、2004 年。

討 論

小路田 それでは準備ができたようですので、これから討論を始めます。限られた時間で十分な議論はできないと思いますが、時間がないので、司会の私のほうから先生方に一点ずつご質問するところから始めたいと思います。

まず北條さんの報告ですが、唐古・鍵遺跡から見て東の山並みが一つの日時計の役割、季節の運行を計る役割をしているというのは画期的な発見だろうという感じがします。逆に言うと、そういう場所を選んでわざわざ唐古・鍵の相当巨大な集落、あるいは都市という表現をしてもいいかもしれませんがそれをつくった。しかも非常に低湿地でおよそまちをつくるには不向きな、農耕をおこなうにも不向きな場所にあってつくったことには、かなり人為性が働いていることになります。

そのように非常に人為的に、しかも暦の作成や天体の観測や太陽信仰など、社会として極めて重要なことをおこなうための施設をつくったとすれば、その主体はいったい誰かという問題があります。その主体を国家と表現できないのかということが、1つ大きな問いになると思います。

ついでに今度はそのあとの問題です。唐古・鍵を中心としておこなわれていたことが、古墳時代にもそのまま生きたという話をされました。では、古墳時代と弥生時代の相違は何なのか。あえて古墳をつくる時代と弥生の違いは何かということを、簡単によろしくお願いします。

北 條 簡単というわけにはいきませんが、唐古・鍵遺跡の主体者は誰だったかというところ、間違いなく北部九州に居を定めた弥生の民でしかありえない。なぜかと申しますと、弥生時代は稲作の文化ですが、それを広げていくために不可欠なのは多量の稲粃です。それがなくなると主体性があるはずもなく、稲粃を広げていくところが本拠地ですので、主体は北部九州にあった可能性を見定めるべきです。もちろんそこから拡散していく過程で二次的な拠点が成立した可能性もありますが、基本は今申しあげたとおりです。

さらに稲は貨幣で稲作は貨幣生産でした。ようするに弥生文化の拡がりとは稲粃建て経済の価値観を広げていくことですし、縄文の民をどうやって懐柔するかが焦点となります。縄文の民は男女分業です。農耕をするとしてももっぱら女性がやる。男性は狩や漁をするか運搬などに携わるか、ということです。一方、弥生の民は男女共同参画社会です。また縄文の民は人口を増やしませんけれども、弥生の民は人口が右肩上がり増えます。さまざまな価値観に大きな違いがあるものですから、その懐柔は結構大変で、そのためにはごちそうとしてのコメの飯や餅あるいはそれを加工した酒が絶対に必要で、それを使って懐柔

していく。そういうかなり戦略的な営みの拠点として奈良盆地の中央が選ばれたのではないかと考えるのです。

国家の概念ですが、稲作を広めることは稲穂建て貨幣経済の拡大を意味することになりますから、ホームランドから入植先へと経済圏の枝葉を広げていく過程の、その節目が国家の画期になるだろうということです。

では弥生と古墳の違いは何か、ですが、弥生時代の場合は中期の前半までは温暖な気候の下で営まれていたので安定し、極端な問題は生じなかったのですが、邪馬台国の時期には寒冷化が進んで、いちばん寒かったのは5世紀初頭といわれます。これが6世紀になると再度温暖化に向かいます。

何を言いたいのかということと寒冷化への対処です。前方後円墳が築かれた時代は非常に寒かった。しかし一方で構造的には右肩上がりに人口が増加する局面ですから、寒冷化に耐えるだけのセーフティネットが必要です。そのために古墳づくりが選ばれ、人々がそこに加われば食わせられる、というような形で社会の崩壊を防ぐサバイバルシステムが発動した。それが巨大前方後円墳の築かれた時代であろう、というイメージをもっています。

小路田 北部九州の人々は国家ではないのですか。つまり人の移動というのは非常に曖昧な表現ですね。だったら瓦解とかしないのでは。どうしても神武東征について彼に話させたいのですが。それだけは一生懸命避けているようです。なぜ避けるのかと聞きたいものですから、こういう言い方をしました。

次に館野先生の報告ですが、邪馬台国の話から、小字・小地名からヤマトというのがどんどん広がりをもっていくプロセスを明らかにされたのだと思うのですが、北條報告を聞いて、ヤマトのその前の状態ですね。つまり最初に小さな字名があって、小さな集落があってずっと拡大をしていくというのならわかりやすいのですが、その前に唐古・鍵の営みのようなものがあつたと想定したときに、それをどう思われるのかを聞いてみたいと思います。

館野 それは専門外のことですが、ヤマト王権発祥の地である小地名としてのヤマトには、纏向遺跡がありました。唐古・鍵はそこから少し外れているのですね。ですから寺沢薫さんなどは、弥生時代の奈良盆地における邪馬台（ヤマト）国の中心が唐古・鍵遺跡であり、それとは別に卑弥呼が女王に擁立されてできたヤマト王権（卑弥呼政権）の都が纏向遺跡であり、纏向遺跡の出現とともに唐古・鍵は急速に衰退、消滅していったというように理解されています（寺沢薫「日本列島における国家形成の枠組み」『纏向学研究』1、桜井市纏向学研究センター、2013年）。弥生時代のその辺りがどうだったのかは、私はよくわかりません。ヤマト王権として確立してきたのは小さい地名としてのヤマトのあたりだろうということで、それより前は文献の人間が口を出せるような話ではないと思います。

小路田 もう一点、いいですか。先ほど乙類トという言葉はかなり強調されて、邪馬台国は実はヤマト国だという、これは私もおそらくそうだと思うのです。その場合のヤマト国は女王国で、しかもある意味では三十余国を従える女王国の全体を指しますね。あるいはその中心の一つの国を指すということですから、それは小地名になるかというのは問題になりませんか。

舘野 卑弥呼は邪馬台国の女王であり、彼女の元に統合された全体としては倭国だったと思うのです。いくつかの国を全部合わせて倭国であって、卑弥呼が共立されてできあがった新しい政権の場所が、小さい地名としてのヤマトであるということになるのではないかと思います。この倭という場合は、中国から見て小さいさまざまな国も全部含んで倭国と言っていた。そしてヤマトは卑弥呼がいる倭国の中心であり、さらにその後、そこにおける王権の力が各地におよんでいくなかで、全体としての倭国がヤマトと呼ばれるようになったと考えられます。

小路田 ありがとうございます。次に西村さんの報告ですけれども、日本中を等しく平等に統治しようと権力者が思ったときには、これはヤマトに居を置くしかない。それに対して平安京に拠点を置くことは、平安京は統治するけれどもそれ以外のところは各地域のある意味で自治に任せる。その連絡を取っていくという統治形態にならざるを得ない。等しく統治する、国家を全体として一つの権力が統治するときにはヤマトが不可欠である。それでその後もそうだろうし、だからそれが思い出されていくのだという話だったと思います。まず、それでいいのかということと、なぜヤマトなのか。その場所はヤマトしかないのかということですね。その点はいかがですか。

西村 そんなことをおっしゃいまして、というのが正直なところですよ。整理していただきました論点につきましては、今のところ私はそのように考えています。考え始めたばかりです、というべきかもしれません。ですから、自治をおこなう時にヤマトが想起されたとしても、それはヤマトに拠点を置くという選択のなかにすでに自治の根元が内包されていたということなのか、権力がヤマトを去ることにより育まれたものなのか、漠然と前者のような気がするばかりで、論拠を示して述べることができない状態です。

それは、なぜヤマトなのかという問いにもお答えできないということ。日本列島のほぼ真ん中あたりということであれば、別に山城でもいいような気がします。そこはどうか考えればいいのか、思想上の問題であるばかりでなく、おそらく地勢的な条件なども含めて考えないといけないと思うのですけれども。その点では、吉野川から紀ノ川、東側は櫛田川に沿って山深い紀伊半島を東西に横断する非常に重要な交通路が走っている。それは半島内にとどまらず、列島規模で東西につながっていく交通路である。そういった話を日々、延々と聞かされますうちに、そうなのかなと思い始めているところです。それ以上に、自

分なりにこうだと言える何かをまだ持ち合わせていませんので、お許しいただきたいと思います。

小路田 自分が日々何を言っているかということがあるのですが、それに少しつけ加えておくと、北條さんの話で淀川水系と大和川水系は出てくるのですが、吉野川水系は頭からポンと抜けているのです。私はやはり大和を考えるときに重要な問題だと思うのです。熊野川水系も抜けています。ですから後世の時代のイメージで、実は見てしまっているのではないかという感覚をもって聞かせていただきました。それはちょっと置いておきます。

一渡り全部いきたいと思います。次に今尾さんのお話のなかで、前方後円墳によって権力の可視化ができた権力が、古墳時代の権力だという話をされました。なぜ権力の力というものを前方後円墳で、古墳で可視化しなければいけないのかということ。私は考古学の人のお話を聞いていると、それは自明のように考えて、要は権力の階層性を大ききさで示している、形で示しているという話を、特に都出比呂志さんなどからよく聞きました。しかし、権力を表現するときには何もお墓である必要はないのではないかと思うのです。いろいろなものが可能性としてあるのになぜ古墳なのかということ。

それから先ほど自問自答されて、最後によくわからないと言われていましたが、やはり継体天皇が古墳群をやめることの大きさがあると思うのです。その点はいかがですか。

今尾 両方とも本当に難しくて明快にお返しできないのですが、古墳時代の研究者が古墳を素材にするのは当たり前のことです。古墳の分布状況のなかで導いてくるものとしては、やはり権力の可視化という答えが出てくるだろう。もちろんほかの素材があればそれでいいのですが、現時点では古墳がいちばん大きな材料となる。古墳のなかにはいろいろな文化的要素がある一方で、膨大な労働力が費やされているし、舶来品もあるというそれは「権力でしょう」というぐらいしか答えようがないと思います。しかも列島各域に存在したわけですから、比較するに好都合です。

もちろん集落論でも答えられればいいのですが、今日北條先生が言われた唐古・鍵のように多重環濠がめぐって、1つの「唐古・鍵宇宙」のようなものが規定できるものはいいのですが、とくに古墳時代の集落は、現在、得られる調査情報の限界性がつきまとうもので、材料としては部分的にわかるものの、相互について相対的な評価ができないのです。文献史の先生は、「古墳でどこまでわかるのか」とよく批判されますが、根本は現時点の方法的な問題かもしれません。

もう1つの、継体の出現がなぜ大古墳群の造営停止の起点かということですが、継体はその前の武烈から受け継ぐにあたり、5世紀代の倭の常套的な外交施策であった劉宋への朝貢にもとづいた国内統治ができなくなった時期に、括弧付きですが血縁カリスマとして、請われて出てくる。すると新しい統治方法を考えないといけないだろうということ。自分が「越」から出てきた背景と、そこで鍛えられたなかで、百舌鳥や古市にはもう自分

の王墓をつくらない。でも、墳丘の巨大性だけは残すわけです。

今城塚古墳はこの頃のデータでは少し短くなりましたか、一応 181m ほどでしょうか。同じ時期の北関東の上野の七興山（ななこしやま）古墳が墳長 145m、尾張平野の断夫山古墳 151m、北部九州の磐井墓の岩戸山古墳 138m、タシラカ墓の奈良盆地東南部の西山塚古墳 114m、で、今城塚古墳がひととき大きいのです。そこだけは残すのだけれども、権力の構造を古墳群に表徴させることはやめてしまった。結果をいっているのでは、答えになっていませんね。

小路田 ありがとうございます。何か言い足りないことはありませんか。

北 條 今の今尾先生への問いについての意見を申し述べさせてください。今尾先生の図 6 をご覧いただければと思います。本日は血統のお話をされましたけれども、前方後円墳を各地にたくさんつくっていく、一定地域にどんどんつくり続けるという状態は、財力が世襲されないよう仕組まれた工夫ではないかと思うのです。要するに富はどんどん浪費されてしまう。前の世代に蓄えた財力を次の世代に託さずすべて放出するわけですから、通常の政権運営だとしたら絶対にしてはいけない浪費です。けれどもこれを延々と 200 年以上続けた事実は重い。権力の誇示ではあるのですが、いってみれば誰がいちばん大盤振る舞いしたのかを競うことで誇示された権力です。ですからこれは階層化を阻む社会の典型的なやり方だと思うのです。

ヒントは『三国志-魏書・高句麗伝』にあります。そこでは人々は、上位階層者のことですが、結婚するとただちにお葬式の準備を始めます。葬式時にはそれまで貯め込んだすべての財を使い尽くすと書かれています。これは完全に世襲制を阻むやり方です。しかしその一方で、高句麗は非常に力が強くなります。結束力が高かった。要するに大盤振る舞いをした人間の財力は無になっても権威は高まる方向に作用する。それが先ほど私がお話した瓦解を防ぐというやり方です。そういう形で理解できないでしょうか。今尾先生、いかがでしょうか。

今 尾 そうだと思います。答えなくてもいいと思ってきちんと聞いていなくて申し訳ないのですが、そういう面も当然あると思います。けれども、やはり古墳をつくり続けて古墳群を形成した地域と、1つの盆地に1基の古墳しかない地域は区別して考えた方がよいのではないのでしょうか。例えば、兵庫県の篠山盆地には、規模のある前方後円墳は墳長 140m の中期後半の雲部車塚古墳の1基しかありません。ここでは、財力の「世襲化」が阻まれたのかもしれませんが。新たな段階を迎えたときに、次の地域権力は蓄財を試みたけれども果たせず、その結果、大きな古墳を残せないまま亡くなったのかもしれませんが。もっとも今日、私がテーマにしたのは近畿中部の古墳です。これは権力継承を安定して維持してきたことを見せつけることが、次の財力を用意するための装置でもあったわけです。「中心」

であることを見せつける。近畿中部についてはそういう答えです。各地域についてはまた別の考え方が、北條さんの考え方もあると思います。

小路田 北條さんのいう話は、例えば私的に蓄えた財力をもっている人が、ほかの社会の格差をどう考えるかというときにはわかるのですが、公的に蓄えた財力、つまり何らかの租税であるとか、そういうものをどう使うかという問題の場合は、少し話が違ってくると思います。もう 1 つは、あらゆる権力は、実は無駄なことばかりやっています。例えばお寺さんをつくるとか、意味がないかもしれませんね。それが権力の仕事で、そういうものが逆に遺産として残っていくとか、そういう問題も考えなくてはいけないのではないかと思います。

もうほとんど時間がないなかでもう 1 点だけ、北條報告で非常に面白い問題だと思ったのは、棟持柱建物は実は縄文の人たちの文化であった。この縄文の人たちの文化を取り入れる形で弥生の人たちの中心施設がつくられていった。これは入れ子構造ですね。ですから前の時代を乗り越えていくときに、前の時代を組み入れながら新しい時代をつくっていく。これはそのあとの話もそのようにいわれて、つまり弥生の人たちが唐古・鍵を中心にして太陽信仰の構造をつくって、これを古墳時代の人たちが引き継いだ。けれども引き継ぎ方はまったく違って、ついには古墳というまったく違う施設をつくりあげていく。こういう引継ぎ方をした。

そのようにして一時代が移るときに、古いものを組み入れながら新しいものが立ち上がっていく。逆にそれがおこなわれるときは時代の転換だと捉えることができるのは、1 つの面白い問題だと思います。

先ほどの今尾さんのお話でも、おそらく 5 世紀までの巨大古墳の時代と、継体天皇以降の時代はまったく違う。しかし巨大古墳をつくるという一事だけは残った。ほかのことは全部消し去っていくという新しい律令体制への準備を始める。そのような時代の転換が古いものの継承と、その新しいものへの組み合わせと捉えることができるのであれば、この大和という地域の歴史は、もう少し長く、ある段階論を経た歴史として捉えることができるのではないかと思います。その意味では縄文段階から、一度、通史的に描いてみるのが必要な行為ではないかと思いました。

それから議論にもっていかなかったのですが、館野さんの話と西村さんの話と両方に出てきた山に囲まれているということ。このことが大和を表現するときに非常に重要な表現になっています。ヤマトタケルもそうですし、神武天皇もそうなのですが、山というもののもつ意味です。最後に西村さんは、修験の世界に何かつながっていくものとして捉えられたのですが、これをどう考えるのかも大きな問題だという感じがしました。ですから、大和のもっている地理的な中心性の問題と同時に、神武即位前紀に出てくるような山があるということ。あるいは磐船に乗って飛び降りた変な人がいるという話もそうですが、それらを総合的に捉えてみて、この地域のもつ国家を営めるほどの中心性とはいった

い何なのかがわかっていくと、話が煮詰まっていくのではないかという感じがしました。

申し訳ないのですが、さすがに5時までに終われという絶対的な命令を10分だけ無視させていただきましたので、そろそろ終わりたいと思います。それぞれ違う報告ですがつながるような気がします。それぞれ意見は違ってつながっていくと申しますか、このテーマは最初にお話しましたがほとんど議論されていないテーマだと思います。これは昔、舘野さんと西村さんも参加されていた研究会で、なぜ大和盆地の南部で国が興るのですかと聞いたときに、みんな笑って「わかるわけがないじゃないか」と言われたので、何となく変なことをいったなと感じたことを覚えています。もう十数年前です。そういうテーマを、少し掘り下げていくきっかけが生まれればと思い、この機会に取りあげてみました。

長時間、どうもご清聴ありがとうございました。これで終わりたいと思います。それから、今日のシンポジウムは冊子にしてまとめたいと思っています。また皆さんの手元に届くかもしれませんので、そのときにまた詳しく見ていただければと思います。



【奈良女子大学記念館（国指定重要文化財）講堂 於】

編集後記

学問が学問である以上専門化は不可欠だ。専門家から何の専門性もないような話を聞かされても、面白くも可笑しくもない。

ただ歴史学という学問は、専門化ということにある意味で馴染まない。なぜならば人の生を遥かに超える時間の中で、自分の短い生を見つめ直してみたいと思うから、人は歴史を学ぶのである。しかし専門化の流れは、歴史をできるだけ短い時間と分野に切り刻み、その短い時間と分野の中だけを、人並み以上に詳しく知り、分析する能力を、歴史家に求める。

だから歴史の専門家に、俗にいう「通史」の書ける人はいない。そして誰一人「通史」が書けないから、専門家が「束」になって通史叙述を行う試みが、『……講座』の編纂などといった形で、繰り返さされるが、そうした試みが、その人の歴史への根本的な欲求を満たしたとは、寡聞にして聞いたことがない。

歴史家には本来、専門家的緻密さとともに、素人的おおらかさが求められる。素人的な、素朴で大きな問いを發し、それを専門的に緻密に解く、二重の能力が求められる。

しかし専門化ということが過度に進みすぎた現在、その二重の能力を持った歴史家は殆ど見当たらない。

ならばせめてその真の歴史家たらんと日々志し、葛藤しておられる歴史家に集まってもらい、これ以上はないと思われる大きな問いを課して、ブレインストーミングをしてもらおう。何かが始まるかもしれない。その思いで計画し、執り行ったのが本シンポジウムである。「日本はなぜ大和に誕生したか!」、ほれぼれとするほど大きなテーマではないか。

そして成功したと思う。「新大和論の構築にむけて」何かが始まったと思う。少なくとも、縄文・弥生時代に始まり平安時代に至る大和の歴史を、統一的に捉える視座は生まれかけた。それだけで成功と言っていいだろう。

今後の我々の思索の発展に期待していただければと思う。

小路田 泰直

放送大学奈良学習センター開設 20 周年記念シンポジウム

2016 年 11 月 6 日 奈良女子大学記念館

「日本はなぜ大和に誕生したか！」～新大和論の構築へむけて～

2016 年度放送大学学長裁量経費（学習センター支援）報告書

2017 年 1 月 20 日発行

放送大学奈良学習センター

〒630-8589 奈良県奈良市北魚屋東町奈良女子大学 コラボレーションセンター3F

TEL: 0742-20-7870 FAX: 0742-20-7871